正史を彷徨う

Part VII

森隆一

応神天皇(左)と雄略天皇(右)　(Wikipediaより)

Part VII 序

13・14・15の3章にわたって寄り道をしてきた。最初に取り挙げた国産み神話は記紀に書かれているもので、寄り道ではないとも言えるが、この部分は日本神話とし、歴史の対象とはしないという通説に従った。他の話題は、殆どが紹介程度であるが、日本書紀に戻ることにする。

まずは、Part I で挙げた 課題1と課題2. を再掲する。

課題 1. 神功皇后との間が130年程空くことになる。逆に言えば、神功皇后＝卑弥呼＋壱与(・台与)の卑弥呼以後 130 年余りが隠されたことになる。この隠されたものは何か。

課題 2. 応神天皇以降で、天皇の在位期間の合計が136年短くなることになる。本稿の立場からは遣隋使が派遣された 600 年以降は信用できるとする。「空企画」の応神天皇の即位年の270年から600までの330年を200年に縮めることができるかということである。

この課題を考察するためのキー・ワードは王朝の並立あるいは鼎立かと考えている。律令体制が成立した後でも、南北朝の時代があった。これは天皇一族内部での対立である。高句麗でみたように部族の交替があったかなど幾つかの可能性が考えられる。異なる部族を繋げるために、遠い祖先に繋げる方法がある。継体天皇はこれに相当するのか。

これらのことを片隅において、五王は天皇に対応することにして、各天皇紀を眺めていくことにする。

各天皇紀は、前文と呼んだ部分と記年記事から成る。前文には、父母と即位に至る経緯が書かれている。記年記事は、原則として、年・季節・月・(干支の)日付が書かれている。他には、是月、是歳がある。このうち、年と月を書くことにする。記事の優先度として、中国の王朝との記事・朝鮮三国との記事・固有名詞を含む記事の順に考えていることを Part IV の序で述べた。ここで、固有名詞に制限をしなければ、全ての記事が対象となるであろう。固有名詞は、地名・人名官名を考えている。Part IV では、人名は 、有名な人を除いて、対象外とした。さらに、地名は人名よりは広く扱うとした。

各天皇紀に必ず書かれているものは、后妃、および、崩御の記事である。これに続いて、殆どに陵の位置が書かれている。稀に、次の天皇紀に書かれていることがある。次に書かれているのは、遷宮の記事である。みや(宮)みやこ(京、都)が何時から使われたのか。今のところ、京の初見は景行天皇紀であり、都は、推古天皇紀の難波大都である。倭王の都を邪馬台国としたが、宮の所在地を邪馬台国としてよいかという疑問があるが、宮の所在地を含む国レヴェルの地域が邪馬台国と理解しておく。

16. 応神天皇紀から継体天皇紀

序

応神天皇から継体天皇までの皇統を Wikipedia「皇室の系図一覧」から写したものが次図である。

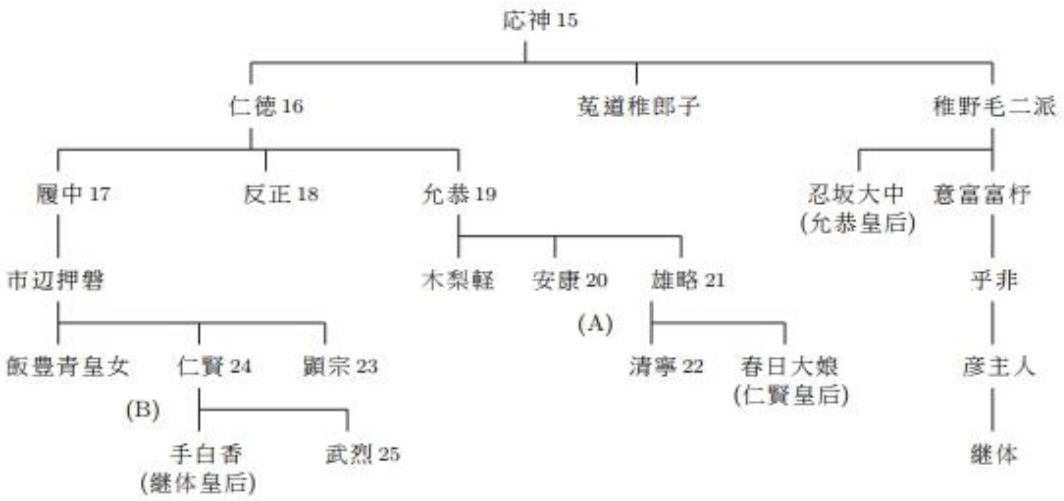

図 VII01 応神天皇から継体天皇

この図は図 VI05 と似ていることは 14.4 節で述べた。ここでも、南北朝のような対立が起きたのではないかと想わせる。ここでは、南北朝のような抗争はなく、蒙古帝国の汗国のように並立していたこ

とも考えられる。便宜的に、允恭天皇の下の枝をAグループ、履中天皇の下の枝を B グループと呼ぶことにする。2 グループの抗争がおき、疲弊したところを別王朝(系統)の継体天皇が統一したというのが、図VIIOIから抱くイメージである。

このことを念頭において、応神天皇紀から継体天皇紀を見ていく。ことにする。全体を通しで見ることを優先し、引用は、訳の補足や替わりになるものを主とし、感想的考察は次章で行うことにする。

前文の文字数を記録することにした。ダウン・ロードした維基文庫のテキストをWordで計ったもので、句読点と括弧を含むものである。

16.1. 応神天皇紀　譽田天皇

各記事の年記の後の数字は、前が作業仮説 I12 により換算した西暦、後は空企画による西暦であり、Wikipedia の記事の記年とも一致することから、定説と思われる。

前文は 303 文字と短かめである。

元年正月 皇太子即位　　皇太子は即位した。

二年 397,271 三月 立仲姫爲皇后　　仲姫を皇后とした。

三年 398,272 十月 東蝦夷悉朝貢 即役蝦夷而作厩坂道

東蝦夷が悉く朝貢した。蝦夷たちに厩坂道を造らせた。

朝貢した東蝦夷を厩坂道の造作に使ったということである。かなりの人数が必要と思われ、投降的な朝貢か、厩坂道から遠くはないところに居たと考える。倭の朝貢とは異なっているが、中国の王朝でも、近接する場合は使役を命じられたかもしれない。

コトバンク「厩坂」世界大百科事典 第 2 版の解説では

奈良県橿原市付近の歴史地名。応神朝に，百済から貢上された馬を飼育した所。日本書紀 応神 3 年 10 月条に，東の蝦夷を役して厩坂道を作ったこと，15 年 8 月条に，百済王の遣わした阿直岐に命じ，軽坂上の厩で良馬 2 匹を飼育させた記事がみえている。軽衢から南方の緩やかな坂を指すのであろう。厩坂道は下ッ道の前身かと思われる。厩坂の近くには，応神天皇の軽島豊明宮が伝承され，また，舒明朝には厩坂宮が営まれている。

と書かれている。

十一月 處々海人□□之不從命（□□ 此云佐麼賣玖）

海人の□□が命に従わなかった。□□は佐麼賣玖という。

是歲百濟辰斯王立之失禮於貴國天皇 故遣紀角宿禰 羽田矢代宿禰 石川宿禰 木菟宿禰 嘖讓其无禮状 由是 百濟國殺辰斯王以謝之 紀角宿禰等便立阿花爲王而歸

この年、百済の辰斯王が立った。これは天皇に対して失礼なことである。それ故、紀角宿禰・羽田矢代宿禰・石川宿禰・木菟宿禰を派遣し、その無礼を責めた。是より、百濟國は辰斯王を殺し謝罪した。紀角宿禰らは阿花を王として帰った。

辰斯王の在位期間は385年から392年までである。作業仮説I12は百済の王統を基にしているから年号と百済の王の在位期間とは合いやすい。

無礼を責められただけで国王を殺すのか。あるいは、叱責の内容がそれに相当するものなのか。百済本記からは、辰斯王は前々王近仇首王の仲子で前王の枕流王の弟となっている。枕流王は七月に即位し翌年の十一月に薨じている。また、辰斯王は高句麗の談德王に攻められ、狗原行宮で薨じた。次は枕流王の元子阿莘王で、六年397に倭国と結好し、太子の腆支を質とした。

これらから、無礼は枕流王を廃して王となったとも考えられるのではないか。また、和平派と抗戦派との抗争も考えられる。

五年八月400,274 令諸國定海人及山守部

諸国に海人と山守部を定めるように命じた。

十月 科伊豆國令造船 長十丈 船既成之 試浮于海 便輕泛疾行如馳 故名其船曰枯野

伊豆國に船を造るよう命じた。長さ十丈の船が出来た。試しに海に浮かべると軽く疾走した。それ故、枯野と名付けた。

海人は海運か海軍か、山守部は山林と鉱山ではないか。船を造る記事は、この他には、崇神天皇十七年の記事もある。

六年 401,275 二月天皇幸近江國。至菟道野上而歌之曰・・・

近江国に幸した。菟道野の上に至ったとき、次の歌が聞こえた。・・・

七年 402,276 九月 高麗人 百濟人 任那人 新羅人 並來朝 時命武内宿禰 領諸韓人等作池 因以名池號韓人池

高麗人・百濟人・任那人・新羅人が並んで来朝した。武内宿禰に命じて、諸韓人に池を作らせた。その池を韓人池と名付けた。

來朝したのは亡命か移民か。高麗人も諸韓人に入るのか。新羅の初めての朝貢は、梁の普通二年 521 である。また、池は何処に造ったのか明記されていない。溜め池の多いのは、四国の瀬戸内側、河内南部と奈良盆地であるが、奈良盆地は奈良湖を考慮すれば、この時点のこととしては除外するのが妥当と考える。

奈良湖が干上がっていくときに池が残った(残した)ことは考えられる。これを灌漑用にため池としたことは考えられる。

八年 403,277 三月 百濟人來朝 （百濟記云 阿花王立无禮於貴國 故奪我枕彌多禮 及□南 支侵 谷那東韓之地 是以遣王子直支于天朝 以脩先王之好也）

百濟人が來朝した。（百濟記云以下は理解できていない。）

阿花王の在位期間は 392 年から 405 年。百濟記云と応神天皇三年の記事との関係を調べることが必要とある。

九年 404,278 四月 遣武内宿禰於筑紫以監察百姓 時武内宿禰弟甘美内宿禰 欲廢兄 即讒言于天皇 武内宿禰常有望天下之情 今聞 在筑紫而密謀之曰 獨裂 筑紫招三韓令朝於己 遂將有天下 於是天皇則遣使以令殺武内宿禰 時武内宿禰歎之曰：・・・時武内宿禰。獨大悲之 竊避筑紫浮海 以從南海廻之 泊於紀水門

武内宿禰を筑紫に派遣し、百姓を監察させた。・・・

（時武内宿禰以下は**面白そうだが、理解できていない。）**

監察百姓は官名ではないと思われる。

百済とか新羅が出てくるのに、三韓はおかしい。七年八年の記事か

ら、朝鮮半島を韓とよんでいたことは考えられる。これは、唐の用法と似ている。共にカラという訓読みをもつのも興味ある。大陸からの人の移動の大半は朝鮮半島を経由したことによるのかもしれない。

筑紫から南海を廻り紀水門に泊るのも若干の疑問が生じる。筑紫から還るのに瀬戸内海を通らずに南海を何故通るのか、である。

十一年 406,280 有人奏之曰 日向國有孃子 名髪長媛 即諸縣君牛諸井之女也 是國色之秀者 天皇悦之 心裏欲覓

ある人が奏上した：日向國に髪長媛という娘がいる。諸縣君の牛諸井の娘で、その国で秀でた美女である。・・・

十三年三月 天皇遣專使以徵髪長媛　　髪長媛を迎える使者を派遣した。

十一年の記事の始めに書かれている 日向國有孃子 名髪長媛 を考えてみる。まず、このとき天皇は何処に居たかである。日本書紀からは、ここまで遷都の記事はないから、神功皇后の崩御地である稚桜宮となる。稚桜宮が近畿にあったとすれば、髪長媛は日向国にいたことから、かなりの長距離である。長距離の(政略)結婚としては朝日姫・和宮が有名であるが、これらよりも長距離である。戦国時代に朝倉義景が京都から正・側室を迎えた例もあるが、これはかなり近い。

応神天皇は日向国にそんなに離れていない所に居たと考えるのが自然と思われる。神武天皇も日向国吾田邑の吾平津媛を妃とした。これは１つの話のコピーではないかとも思える。

信長が、斎藤道三の娘濃姫を娶ったのと同じ効果も考えられる。すなわち、熊襲の支配した地域の統治には、日向の豪族の助けがあって出来たのではないかと考える。

九月 髪長媛至自日向・・・ 髪長媛が日向よりきた。・・・

・・・には、髪長媛を大鷦鷯尊(仁徳天皇)の妃とする話が書かれているが、この話は十分に理解できていない。

十四年 409,283 百濟王貢縫衣工女 曰眞毛津 是今來目衣縫之始祖也

百濟王は縫衣工女を貢いだ。眞毛津といい、來目衣縫の始祖である。

是歲 弓月君自百濟來歸因以奏之曰 臣領己國之人夫百廿縣而歸化然因新羅人之拒 皆留加羅國爰遣葛城襲津彦 而召弓月之人夫於加羅然經三年而襲津彦不來焉

この年、弓月君は百済より來歸し、奏上した：臣は自らの国の百廿縣の民を率いて帰化した。しかし、新羅がこれを拒み、皆は加羅國に留まっている。弓月君の民を加羅から召すために葛城襲津彦を派遣し、弓月の人夫を加羅で召集

した。3年経ったが襲津彦は帰っていない。

新羅が拒めば、加羅から日本に渡ることは出来なかった。

弓月君は何故來歸したか。283年では百済が存在したのかも定かでない。新羅はさらに遅いと考えられ、409年のほうが合う。102県の民はそのまま信じることは難しいが、かなりの人数であろう。これは亡命ではないか。三国史記から、百済の内紛やの倭に関する記事から確かめられるか。

Wikipedia「弓月君」から引用する。

概説：帰化の経緯は日本書紀によれば、まず応神天皇14年に弓月君が百済から来朝して窮状を天皇に上奏した。弓月君は百二十県の民を率いての帰化を希望していたが新羅の妨害によって叶わず、葛城襲津彦の助けで弓月君の民は加羅が引き受けるという状況下にあった。しかし三年が経過しても葛城襲津彦は、弓月君の民を連れて帰還することはなかった。そこで、応神天皇16年8月、新羅による妨害の危険を除いて弓月君の民の渡来を実現させるため、平群木菟宿禰と的戸田宿禰が率いる精鋭が加羅に派遣され、新羅国境に展開した。新羅への牽制は功を奏し、無事に弓月君の民が渡来した。

十五年 410,285 八月 百濟王遣阿直岐 貢良馬二匹 即養於輕坂上厩 因以以阿直岐令掌飼 故號其養馬之處曰厩坂也 阿直岐亦能讀經典 即太子菟道稚郎子師焉 於是天皇問阿直岐曰 如勝汝博士亦有耶 對曰 有王仁者 是秀也 時遣上毛野君祖荒田別 巫於百濟 仍徵王仁也 其阿直岐者 阿直岐史之始祖也

百濟王は阿直岐を派遣し、良馬二匹を貢いだ。・・・また、阿直岐は經典に通じていたため、太子菟道稚郎子の師となった。天皇は阿直岐に優れた博士がいないか問うた。王仁は秀でていると阿直岐は答えた。・・・

十六年 411,286 王仁來之 則太子菟道稚郎子師之 習諸典籍於王仁 莫不通達 故所謂王仁者 是書首等之始祖也

王仁が来た、太子菟道稚郎の師となった。・・・

太子の菟道稚郎子に百済人の阿直岐や王仁を師としたということである。これは、厩戸皇子とも云われている聖徳太子を連想させる。さらに、遣隋使は聖徳太子が皇太子・摂政の時に行われた。倭王讃の朝貢においても、皇太子菟道稚郎子は聖徳太子と同様の役割を果たしたのではないかと考えている。また、神武天皇の第１皇子手研耳命

は反逆し討たれたことになっている。

Wiki「聖徳太子」では、**大宝令の注釈書古記(天平10年 738年頃)には上宮太子の諡号を聖徳王としたとある、**と書かれている。
Wiki「菟道稚郎子」には、**宇治に菟道宮を営んだといい、・・・古事記・日本書紀の郎子に関する記載には多くの特異性が指摘されるほか、播磨国風土記には郎子を指すとされる宇治天皇という表現が見られるこれらの解釈を巡って、天皇即位説や仁徳天皇による郎子謀殺説に代表される数々の説が提唱されている人物である、**と書かれている。

宮は天皇の住まいに用いられている。菟道宮はどうか。菟からは出雲を連想する。淡(阿波)路と同様に考えれば、菟道(路、治)は出雲に行く路となる。

是歳405百濟阿花王薨 天皇召直支王謂之曰 汝返於國以嗣位 仍且賜東韓之地而遣之（東韓者 甘羅城 高難城 爾林城是也）

この年、百濟の阿花王が薨じた。天皇は直支王を召して国に帰り王位を継ぐように言った。東韓之地を与えた。

これから、十五年の記事の百済王は阿花王となる。割譲を要求したということは、倭が東韓(甘羅城・高難城・爾林城)を支配していたことになる。こび3城は何処に比定できるのか。

八月 遣平群木菟宿禰 的戸田宿禰於加羅 仍授精兵詔之曰 襲津彦久之不還 必由新羅人拒而滞之 汝等急往之撃新羅披其道路 於是木菟宿禰等進精兵莅于新羅之境 新羅王愕之服其罪 乃率弓月之人夫 與襲津彦共來焉

平群木菟宿禰と的戸田宿禰に精兵を授け加羅に派遣するときにいった: 襲津彦久が帰ってこない。新羅人の拒絶により留まっているはずである。汝らは往って新羅を撃ちその道路を披くこと。木菟宿禰らは兵を新羅との境に進めた。新羅王はこれに愕きその罪に服した。弓月の民と襲津彦と共に帰ってきた。

晋書では朝鮮は馬韓・辰韓・弁韓となっている。晋が滅びたのは420年であるから、新羅が出てくるのは 300 年頃より 400 年頃のほうが妥当と考える。百済は晋の咸安二372年に朝貢しているが、これは、四夷傳ではなく、簡文帝紀に書かれている。新羅が対外的に攻勢になるのは金王朝が整った後と考えている。8.3.節の再修正王統では、金王朝は334年からである。

新羅本記の倭に関する記事については、28 章とかなり先で扱う予定である。

十九年 414,289 十月 幸吉野宮 時國樔人來朝之

吉野宮に幸した。この時、国樔人が来朝した。

廿年 415,290 九月 倭漢直祖阿知使主 其子都加使主 並率己之黨類十七縣而來歸焉

倭漢直の祖の阿知使主とその子の都加使主が黨類十七縣を率いて來歸した。

コトバンク「使主」より

「デジタル大辞泉の解説」: 古代の姓(かばね)の一。渡来人に多い。

「大辞林 第三版の解説」: ① 上代の姓かばねの一。渡来人氏族に多い。② 上代の敬称の一。人名の下に添えて用いた。 「中臣なかとみの烏賊津いかつの－／日本書紀 神功訓」

「精選版 日本国語大辞典の解説」: 〖名〗 古代の姓(かばね)の一つ。臣(おみ)②と同じで、渡来人に多い。※書紀 (720) 顕宗即位前「使主、此をば於瀰(オミ)と云ふ」

廿二年 417,292 三月　天皇幸難波居於大隅宮

天皇は難波の大隅宮に行幸した。

九月　天皇狩于淡路嶋　・・・　天皇便自淡路轉以幸吉備　遊于小豆嶋

天皇は淡路嶋で狩りをした。　・・・　天皇は淡路から吉備へ行幸し、小豆嶋で遊んだ。

亦移居於葉田（葉田　此云簸娜）　葦守宮　時御友別参赴之　則以其兄弟子孫　爲膳夫而奉饗焉・・・

また、葉田葦守宮移り住んだ。このとき、御友別が赴け参った。・・・

移居は遷都か。

ぴんいん　葉田：yè tián、簸娜：bò/bǒ nà

このピンインは、あまり有効でない気がする。現代の発音と三国・南北朝の時代とは異なるということも考えられるが、日本の音読みも変わったのではないかと思える。しばらくは続ける。

どの段階で作成されたかわからないが、(〇〇此云〇〇)が増えてきた。

陵墓探訪記「葉田葦守宮」によれば、**岡山県岡山市北区下足守**にあり、**葦守八幡宮の西参道の鳥居の脇に葉田葦守宮阯石碑が建ってい**

ます、ということである。

行幸の順番を書かれた順と逆にすれば、

吉備 → 小豆嶋 → 淡路嶋 → 難波大隅宮

となる。11 章で扱った難波之碕までの神武東征ルートは

速吸之門(45 歳 10 月) → 筑紫国・菟狭

→ 筑紫國・崗水門(11 月) → 安藝國・埃宮(12 月)

→ 吉備國・高嶋宮 (46 歳 3 月) → 浪速國・方到難波之碕

であった。応神天皇記から得られたるルートは、神武東征ルートの吉備と難波となり得ると思われる。これを山陽道海ルートとしよう。他に吉備から難波までのルートとしては、山陽自動車道ルートと中国自動車道ルートが考えられる。また、東征ルートとしては南海道ルートも考えられる。

廿五年 420,294 百濟直支王薨 420 即子久爾辛立爲王 王年幼 大倭木滿致執國政 與王母相姪 多行無禮 天皇聞而召之 (百濟記云 木滿致者是木羅斤資討新羅時 娶其國婦而所生也 以其父功專於任那 來入我國往還貴國 承制天朝執我國政 權重當世 然天皇聞其暴召之)

百濟の直支王が薨じた。子の久爾辛が王となった。王は幼少であったため、

大倭木満致は国政を執り、王母と相姪し、無禮な行いが多かった。・・・

作業仮説 I12 の基となった記事である。

百済本記では、久尓辛王の記年記事は崩御の記事のみである。

Wikipedia「木満致」の記事はよくまとまっている気がするので、前文を引用する。

木満致は、百済記や日本書紀に伝わる 5 世紀頃の百済官人。百済将軍の木羅斤資の子で、百済の国政を執ったとされる。
出自の木氏は、隋書百済伝において百済の大姓八氏の 1 つに挙げられる氏族である。日本書紀応神天皇 25 年条によると、百済の直支王(第 18 代腆支王、405-420)が薨じてその子の久爾辛(第 19 代久尓辛王)が即位すると、王が幼少であったため木満致が政治を行なった。しかし満致が王の母と密通などをはたらいたため、応神天皇が満致を召し出したという。同条では続けて百済記(百済三書の 1 つ:非現存)の記述を引用する。その中で、木羅斤資が新羅を討った際にその国の女を娶って生んだ子が木満致であるとする。そして父の功によって任那の政治を行なったほか、百済・日本の間を往来して日本の朝廷の命を受けているとして百済の政治を執り、君主のような権勢を誇った。

しかしその暴政が日本に聞こえたため、日本の朝廷に召し出されたという。

なお三国史記・百済本紀蓋鹵王 21 年(475 年)条では、高句麗からの攻撃を受けた蓋鹵王(第 21 代王、455-475)が南方に王子(第 22 代文周王、475-477)を送ったとするが、王子に同行した中に木劦満致の名が存在する。これと木満致とを同一人物とする説がある一方、年代が大きく隔たるため別人とする見解が強い。

木満致が活躍した年代として、記事に見える腆支王(直支王)の死去年については史料で異同がある。三国史記・百済本紀では西暦 420 年とするが、日本書紀の紀年では応神天皇 25 年は西暦 294 年となり、応神天皇紀では一般的な干支 2 運の繰り下げを行なっても西暦 414 年となり 6 年の誤差が存在する。また宋書では百済国伝において 420 年・424 年の映(腆)の遣使、映の死去を受けた 430 年の毗(第 20 代毗有王)の遣使を伝えるほか、宋書本紀では 429 年の百済王の遣使を伝えるため、これらによると西暦 429 年から 430 年の間の死去となる(宋書で久尓辛王は登場しない)。記事では、父の木羅斤資が百済将軍として大加耶を復興したのを受けて木満致が同地域の政治を執ったとあるが、実際には木満致が百済側で大伽耶問題に専門的にあたった程度に過ぎないと推測される。木満致が百済の国政を握ったこ

とについても不詳であり、疑義が指摘される。

木満致に関しては、5世紀後半頃の蘇我満智と音が通じることからこれらを同一人物と考え、木満致が日本に渡来して蘇我氏を興したとする説が知られる。これは、応神天皇25年を干支3運繰り下げると西暦474年となって蓋鹵王21年(475年)にほぼ等しいことから、木満致の日本への召し出しと文周王・木劦満致の南への派遣を同一視した説で、蘇我氏の開明性はこのように渡来系氏族であったことにより生じたと説明される。しかし、応神天皇紀は通常干支2運を繰り下げるべきこと、木満致・木劦満致や蘇我満智の所伝年代は開きがあり全てを同一人物と見なせないこと、大姓の木を捨てる根拠が希薄であること、秦氏・漢氏が渡来系を称するので当時の情勢として出自を偽ることは不可能と見られること、そもそも文周王は文脈上は新羅に向かったと見られることなどから、否定される向きが強い(詳細は「蘇我氏」も参照)。

この記事は、筆者の抱いた疑問に殆ど触れている。大倭木満致と大倭がついているのは何故か。

廿八年423,297 高麗王遣使朝貢 因以上表 其表曰 高麗王教日本國也

時太子菟道稚郎子讀其表 怒之責高麗之使 以表状無禮 則破其表

高麗王が使いを派遣し朝貢してきた。携えた文では：高麗王は日本国に教えると書かれていた。太子菟道稚郎子はその文を読んで怒り高麗の使いを責め、文が無礼であるとして、その文を破いた。

この記事からは、菟道稚郎子は外交に関わっていたことが考えられる。外交文書は中国語(漢文)で書かれていたはずである。百済人の阿直岐や王仁を師としたことから、中国語を習得していたと思われる。中断していた朝貢を再開した王としてふさわしいと思われる。通訳は書かれていないので、高句麗の使いとは会話ができたと考えるしかない。

卅一年 426,300 八月 詔群卿曰 官船名枯野者 伊豆國所貢之船也 是朽之不堪用

群卿に対し、次のように言った。官船の枯野は伊豆国の献じたもので、古くなり使用できない。

32 年から 36 年までの 5 年間記事は無い。

卅七年 432,306 二月 遣阿知使主 都加使主於呉 令求縫工女 爰阿知使主等 渡高麗國欲達于呉

阿知使主と都加使主を呉に派遣した。・・・高麗国に渡り、呉に達することを望んだ。

この記事から、呉国は高麗国の先、すなわち中国にあったことになる。ただし、五十八年の記事では、呉國 高麗國と並んで書かれている。三国志の帯方郡のように、遼東郡か山東半島(東莞郡)かもしれない。呉からは後者であろう。

五王の朝貢で近いものは、元嘉七年 430 倭國王遣使獻方物 である。表 IV401 からは倭王は珍となるが、宋書の記事には王名が書かれていない。

卅九年 434,298 百濟直支王 遣其妹新齊都媛以令任 爰新齊都媛率七婦女而來歸焉

百濟の直支王は妹の新齊都媛を派遣することを命じた。新齊都媛は七婦女を率いて來歸した。

二十五年に直支王は薨じ、子の久爾辛が王となったと書かれてい

る。百済本記からは毗有王の在位期間は 427 年から 455 年である。

四十年 435,299 立菟道稚郎子爲嗣 即日任大山守命令掌山川林野 以大鷦鷯尊太子輔之 令知國事

菟道稚郎子を後継とし、大山守命に山川林野を掌るように命じ、大鷦鷯尊に太子輔とし知国事を命じた。

四十一年 436,300 二月 天皇崩于明宮 時年一百一十歳

明宮で崩じた。110 歳であった。

是月 阿知使主等自呉至筑紫 時胸形大神有乞工女等 故以兄媛奉於胸形大神 是則今在筑紫國御使君之祖支 既而率其三婦女以至津國及于武庫 而天皇崩之不及 即獻于大鷦鷯尊 是女人等之後 今呉衣縫蚊屋衣縫是也

阿知使主らは呉より筑紫に戻った。このとき、胸形大神は工女などを乞うた。ゆえに、兄媛を胸形大神に奉った。これが、今筑紫国にいる御使君の祖である。(阿知使主は) 三婦女を率いて津國に至り武庫に着いた。・・・女人等を大鷦鷯尊に献じた。・・・

四十年の記事で、太子である菟道稚郎子を後継としたということはどういうことであろうか。太子が即位できない事情があったと考

えざるを得ない。さらに、就位しなかったとすれば前帝の決定に反することになり、譲り合いではなく、抗争があったと考える。先帝の決定に反することから、譲り合ったとしたと思われる。

16.2. 仁徳天皇紀　大鷦鷯天皇

前文は1501文字と長く、しかも、菟道稚郎子の譲位の話であるが、理解できていない。

簡単には訳せそうでないので、要約とも思われるWikipedia「菟道稚郎子」日本書紀の記事を引用する。ここで、大鷦鷯尊は仁徳天皇である。

応神天皇40年1月に皇太子となった。翌年に天皇が崩じたが、郎子は即位せず、大鷦鷯尊と互いに皇位を譲り合った。そのような中、異母兄の大山守皇子は自らが太子に立てなかったことを恨み、郎子を殺そうと挙兵した。大鷦鷯尊はこれをいち早く察知して郎子に伝え、大山守皇子はかえって郎子の謀略に遭って殺された。その際、大山守皇子の遺骸に向けて次の歌を詠んだという。

この後、郎子は菟道宮に住まい、大鷦鷯尊と皇位を譲り合うこと3年に及んだ。永らくの空位が天下の煩いになると思い悩んだ郎子は互譲に決着を期すべく、自ら果てた。尊は驚き悲しんで、難波から菟道宮に至り、遺体に招魂の術を施したところ、郎子は蘇生して妹の八田皇女を後宮に納れるよう遺言をし、再び薨じたという。

郎子の妹ということは大鷦鷯尊にも妹となる。応神天皇紀 2 年の記事には、八田皇女はないが、矢田皇女の名があり、宮主宅媛を母とする同母妹である。

応神天皇紀には、百済王との交流が書かれている。また、垂仁天皇紀には、新羅王子の天日槍の移住が書かれている。これらの記事については三国史記に対応する記事が見つけられるかを検討することが必要で、今後の課題としておく。28 章で扱う予定である。

仁徳天皇と菟道稚郎子との争いは東遷派と朝鮮維持派対立が考えられる。また、百済系と新羅系の対立も考えられる。この場合には、応神天皇記 15 年の記事から、菟道稚郎子は百済系になり、仁徳天皇は新羅系となる。

仁徳天皇記の記年記事を見ていく。

元年正月 大鷦鷯尊即天皇位 尊皇后曰皇太后 都難波 是謂高津宮

仁徳天皇は即位した。皇后を皇太后とし、難波を都とした。これが高津宮である。

陵墓探訪記「難波高津宮」では、

高津宮跡の場所は諸説あり、一番有力な説は難波宮跡らしいですがまだ確定されていません。高津宮址の石碑は難波宮跡から 1km ほど南の高津高校の正門を入って左へ数十ｍ奥にあります。

高津宮(神社)は清和天皇 851-880 の時代に高津宮跡に建てられたと伝えられていますが、元々は大阪城のあたりにあり、正親町天皇の時代に今の場所に移されたそうです。

二年春三月 立磐之媛命爲皇后 后生大兄去來穗別天皇 住吉仲皇子 瑞齒別天皇 雄朝津間稚子宿禰天皇 又妃日向髮長媛生大草香皇子。幡梭皇女

磐之媛命を皇后とした。后は大兄去來穗別天皇・住吉仲皇子・瑞齒別天皇・雄朝津間稚子宿禰天皇を生んだ。妃の日向髮長媛は大草香皇子と幡梭皇女を生んだ。

四年二月 詔羣臣曰 朕登高臺以遠望之 烟氣不起於域中 以爲百姓既貧 而家無炊者

羣臣に詔した：高臺に登って遠くを望んだ。そこには烟氣が立ち上がってい

ない。百姓は貧しいため、煮炊きをするものがいない。

七年四月 天皇居臺上而遠望之 烟氣多起

天皇は臺上にて遠くを望んだ。烟氣が多く立ち上がっていた。

百姓は今の百姓か、百の姓で政権関係者だったか。

これは有名な話であるが、この時代はこんなにノホホンとした時代であったか疑問である。実際、この後は皇位をめぐりかなり血なまぐさい記事が書かれている。

七年八月 爲大兄去來穗別皇子定壬生部 亦爲皇后定葛城部

大兄去來穗別皇子に壬生部を定めるようにし、皇后のために葛城部を定めた。

大兄去來穗別皇子が皇太子となるのは卅一年である。後継者となり得ることを考えれば、守る家臣団と軍隊が必要であろう。これを制度化したものか。

十一年十月 掘宮北之郊原 引南水以入西海 因以號其水曰堀江 又將防北河之□ 以築茨田堤 是時有兩處之築而乃壞之難塞

宮の北の原を堀、南の川を西海に流した。そこを堀江といった。北

河の洪水を防ぐため、茨田堤を築いた。・・・

十一年 是歲 新羅人朝貢 則勞於是役

この年、新羅人が朝貢した。役として働かせた。

朝貢とあるが、使節ではなく、移住者か。

十二年七月 高麗國貢鐵盾 鐵的 高麗国が鉄盾と鉄的を貢いだ。

八月 饗高麗客於朝 高麗の客を朝廷で供宴した。

十月 掘大溝於山背栗隈縣以潤田 是以其百姓每年豐之

山背栗隈縣に大溝を掘り、田を潤した。これ以後、百姓は毎年豊作となった。

十三年九月 始立茨田屯倉 因定春米部

茨田屯倉を立て始めた。よって、春米部を定めた。

十月 造和珥池 是月 築横野堤

和珥池を造った。この月、横野堤を築いた。

十四年十一月 爲橋於猪甘津 即號其處曰小橋也

猪甘津に橋を造った。その地を小橋と名付けた。

是歳 作大道置於京中 自南門直指之至丹比邑

京に大道を造った。南門から南には丹比邑がみえる。

京はどこか。ここまでの記事からは、難波高津宮であろう。**また、**推古天皇紀の難波大都との関係は。

十七年 新羅不朝貢 新羅が朝貢しなかった。

九月 遣的臣祖砥田宿禰 小泊瀬造祖祖賢遺臣 而問闕貢之事 於是新羅人懼之 乃貢獻調絹一千四百六十疋及種種雑物并八十艘

的臣の祖の砥田宿禰と小泊瀬造の祖の祖賢遺臣を派遣し、朝貢のないことを問うた。新羅人はこれに懼れて調絹を一千四百六十疋と種種雑物を八十艘で貢獻した。

18 年から 21 年まで記事なし、

廿二年正月 天皇語皇后曰 納八田皇女將爲妃 時皇后不聽・・・

天皇は皇后に、八田皇女を妃に入れると言った。皇后はこれを聞かず・・・

23 年から 29 年まで記事なし。

卅年九月　皇后遊行紀國到熊野岬　即取其處之御綱葉(葉　此云箇始婆)而還　於是曰　天皇伺皇后不在　而娶八田皇女納於宮中　時皇后　到難波濟　聞天皇合八田皇女而大恨之・・・更還山背　興宮室於筒城岡南而居之

皇后は紀伊国を遊行し、熊野岬に到った。・・・

十一月　天皇浮江幸山背　　天皇は河を船で山背に幸した。

卅一年正月　立大兄去來穂別尊爲皇太子

大兄去來穂別尊を皇太子とした。

卅五年六月　皇后磐之媛命薨於筒城宮

皇后の磐之媛命が筒城宮にて薨じた。

卅七年十一月　葬皇后於那羅山　　皇后を那羅山に葬った。

四十一年三月　遣紀角宿禰於百濟　始分國郡場　具録郷土所出　是時百濟王之族酒君无禮・・・

紀角宿禰を百済に派遣し、・・・。この時百済王族の酒君は無礼をはららき、・・・

44 年から 49 年までの 6 年間記事なし。

五十三年　新羅不朝貢　　新羅が朝貢しなかった。

五十五年 蝦夷叛之 遣田道令擊 則爲蝦夷所敗 以死于伊寺水門

蝦夷が叛いた。田道に命じ、これを撃つように派遣した。蝦夷に敗れ、伊寺水門にて死んだ。

五十八年十月 呉國 高麗國並朝貢　　呉国と高麗國がともに朝貢した。

六十七年十月 幸河内石津原以定陵地

河内の石津原に幸し、陵の地と定めた。

是歳 於吉備中國川嶋河派有大口令苦人

この歳、吉備の中国の川嶋河において、・・・

68 年から 86 年までの 18 年間記事無し。

八十七年正月 天皇崩　　天皇が崩じた。

十月 葬于百舌鳥野陵

崩御時の年齢が書かれていない。

仁徳天皇の在位期間は 313 年から 399 年と長いが、空白期間もかなりある。

本稿の立場からは、都が難波というのは問題である。応神天皇紀では、淡路から吉備への行幸が書かれていた。

仁徳天皇の次は、履中天皇 400-405、反正天皇 406-410、允恭天皇 413-453 と 3 人の皇子が継いでいる。あり得ないことではないが、少し不自然な気もする。履中天皇・允恭天皇には淡路が書かれている。

16.3. 履中天皇紀　去來穗別天皇

前文は1341字でかなり長い。

大鷦鷯天皇太子也（去來 此云伊弉）母曰磐之媛命 葛城襲津彦女也

大鷦鷯天皇(仁徳天皇)の太子である。母は磐之媛命で葛城襲津彦の女である。

ぴんいん　去來：qù lái、伊弉：yī zàng

大鷦鷯天皇卅一年正月 立爲皇太子（時年十五）

皇太子となる。この時、15歳であった。

これから、仁徳天皇17年に生まれたことになる。磐之媛命が皇后となったのは仁徳天皇2年であった。かなり遅い出産である。また、仁徳天皇の崩御は87年であるから、71歳で即位したことになる。

前文はさらに次が書かれている。

太子自諒闇出之 未即尊位之間 以羽田矢代宿禰之女黒媛欲爲妃 納采既訖 遣住吉仲皇子而告 吉日 時仲皇子冒太子名以 黒媛 是夜 仲

皇子忘手鈴於黒媛之家而歸焉

が続き、仲皇子の話がさらに続く。詳細は理解できていない。この内容はWikipedia「住吉仲皇子」に書かれている。

日本書紀履中天皇即位前条によれば、仁徳天皇87年1月に天皇が崩御したのち、皇太子で兄の去来穂別(のちの履中天皇)が黒媛(羽田矢代宿禰の娘)を妃にしようと思ったが、仲皇子が去来穂別の名を騙って黒媛を犯してしまった。仲皇子は発覚を恐れ、天皇の宮を包囲し焼いた。しかし去来穂別は脱出しており、当麻径を通り大和に入った。この時、仲皇子の側についた阿曇連浜子の命で後を追った淡路の野島の海人らは、かえって捕らえられた。また、仲皇子側であった倭直吾子籠も去来穂別に詰問され、妹の日之媛を献上して許された。

淡路の野島の海人が現れるのは興味がある。

元年二月 皇太子即位於磐余稚櫻宮 磐余稚櫻宮で即位した。

四月 召阿雲連濱子詔之曰 汝與仲皇子共謀逆 將傾國家 罪當干死然垂大恩而免死科墨 即日黥之と

阿雲連濱子をよんでいった。汝と仲皇子は共謀して反逆し、国家を傾けようとした。これは死に値するが、大恩をもって死を免じ墨刑とする。その日のうちに黥が行われた。

七月　立葦田宿禰之女黒媛爲皇妃　妃生磐坂市邊押羽皇子　御馬皇子　青海皇女（一日飯豐皇女）次妃幡梭皇女生中磯皇女

葦田宿禰の娘の黒媛を皇妃とした。妃は磐坂市邊押羽皇子、御馬皇子と青海皇女(飯豐皇女ともいう)を生んだ。

二年正月　立瑞齒別皇子爲儲君　　瑞齒別皇子を儲君とした。

儲君は他には見当たらない。

weblio辞書・歴史民俗用語辞典「儲君」では、**皇太子となる予定の皇子に宣下された称号、公家・将軍などの世継**、と書かれている。

皇太子とできなかったのか。

十月　都於磐余　當是時　平羣木菟宿禰　蘇賀滿智宿禰　物部伊■弗大連圓(圓　此云豆夫羅)大使主共執國事

磐余を都とした。このとき、平羣木菟宿禰・蘇賀滿智宿禰・物部伊■弗大連・圓(圓　此云豆夫羅)大使主らが国事を執った。

十一月 作磐余池　　磐余池を造った。

四年八月 始之於諸國置國史 記言事達四方志

初めて諸国に国史を置き、言事達四方志を記録させた。

十月 堀石上溝　　石上の堀を掘った。

五年三月 於筑紫所居三神見干宮中言 何奪我民矣 吾今慚汝 於是祷而不祠

筑紫に居る三神が宮中で言った：何故我が民を奪うのか。・・・

九月 天皇狩干淡路嶋 ・・・皇妃薨 天皇大驚之便命駕而歸焉・・・自淡路至

淡路嶋で狩りをした。・・・皇妃が薨じた。・・・淡路より帰った。

十月 葬皇妃 既而天皇悔之不治神崇而亡皇妃　　皇妃を葬った。・・・

六年正月 立草香幡梭皇女爲皇后 始建藏職 因定藏部

草香幡梭皇女を皇后とした。建藏職を始めた。よって蔵部を定めた。

黒媛は皇妃であった。皇后ではないということか。扱いは皇后である。儲君が初出であり、皇太子の呼称の変更が為されたのか。あるいは、皇太子にはできなかったのか。

Wikipedia「草香幡梭皇女」では、

草香幡梭皇女(生没年不詳)は、第17代履中天皇の皇后。古事記には幡日之若郎女とある。父は応神天皇、母は日向泉長媛。中蒂姫命(大草香皇子の妃・眉輪王の母、後に安康天皇の皇后)の母。

履中天皇元年7月4日(400年8月9日)、葛城黒媛(磐坂市辺押磐皇子・青海皇女を産む)と共に履中天皇の妃となった。同5年9月19日(404年11月7日)の皇妃黒媛の死を受け、翌同6年1月6日(405年2月20日)に履中天皇の皇后に立てられた。

三月 崩于稚櫻宮 時年七十　　稚桜宮で崩じた。70歳であった。

在位期間6年で70歳での崩御から、65歳で即位したことになる。

一方、前文の仁徳天皇卅一年の立皇太子の記事からは、

15＋(87－31)＝71歳で即位したことになることを観た。

16.4. 反正天皇紀　瑞歯別天皇

前文は 149 文字と短い。

去來穗別天皇同母弟也 去來穗別天皇二年 立爲立爲皇太子 天皇初生干淡路宮

履中天皇の同母弟である。履中天皇 2 年に皇太子なった。天皇は淡路宮で生まれた。

と書かれている。初 が理解できない。また、生 が自動詞かどうかもわからない。

仁徳天皇記からは、反正天皇は皇后磐之媛都の子である。仁徳天皇に淡路宮があったことなるが、見つけていない。少なくとも生んだ皇后は淡路宮にいたことになる。

淡路を訪れた天皇は、応神天皇と履中天皇である。

元年 正月 儲君即天皇位　　儲君がただちに天皇についた。

八月 立大宅臣祖木事之女津野媛爲皇夫人

大宅臣の祖先の木事の女の津野媛を皇夫人とした。

十月 都於河内丹比 是謂柴籬宮

都を河内丹比に造った。これが柴籬宮である。

Wikipedia「柴籬神社」

柴籬神社は、大阪府松原市にある神社。旧社格は村社。神社の所在地である上田町は18代天皇である反正天皇の都跡(丹比柴籬宮)とされており、神社は仁賢天皇の勅命により 5 世紀後半に創建されたと伝えられている。

祭神は、正殿に反正天皇、相殿に菅原道真・依羅宿禰である。

五年 天皇崩于正寢 正寢にて崩御された。

これが記年記事の全てである。

履中天皇紀で儲君が使われ、反正天皇紀では**儲君と**皇夫人が使われている。この使い分けは意味があるのか。

16.5. 允恭天皇紀　雄朝津間稚子宿禰天皇

前文は 430 文字で長くも短くもない。

瑞歯別天皇同母弟也　　反正天皇の同母弟である。

反正天皇五年 正月 瑞歯別天皇崩 爰群卿議之曰 方今 大鷦鷯天皇之子 雄朝津間稚子宿禰皇子 與大草香皇子 然雄朝津間稚子宿禰皇子長之仁孝 即選吉日 跪上 天皇之璽

瑞歯別天皇(反正天皇)が崩じたとき、群卿は、大鷦鷯天皇(仁徳天皇)の子雄朝津間稚子宿禰皇子と大草香皇子で、雄朝津間稚子宿禰皇子が仁孝に長じているので、吉日を選び、天皇之璽を献上することを決めた。

大草香皇子は妃日向髮長媛との子である。履中・反正・允恭の 3 天皇は皇后磐之媛命との子である。群卿が後継天皇を議したことになる。議論したということは、それぞれを押す勢力があったということか。ここで即位を辞退する話が続き、妃忍坂大中姫命の進言などが書かれている。訳はわからないので、Wikipedia「允恭天皇」から引用しておく。

瑞歯別天皇が即位5年1月」に皇太子を定めずして崩御したため、群臣達の相談により天皇(大王)に推挙された。病気を理由に再三辞退して空位が続いたが、翌年12月に妻の忍坂大中姫の強い要請を受け即位。即位4年9月、諸氏族の氏姓の乱れを正すため、飛鳥甘樫丘にて盟神探湯を実施する。即位5年7月、玉田宿禰(葛城襲津彦の孫)の叛意が露顕、これを誅殺する。即位7年12月、皇后の妹・衣通郎姫を入内させるが、皇后の不興を買う。即位23年、長男の木梨軽皇子を皇太子とするが、翌年に同母妹の軽大娘皇女との近親相姦が発覚。即位42年1月、崩御。古事記では甲午年1月15日に崩じたとされる。木梨軽皇子は群臣の支持を得られず粛清され、弟の穴穂皇子が即位した(安康天皇)。

元年十二月 妃忍坂大中姫命 苦羣臣之憂吟 而親執洗手水 進于皇子前 仍啓之曰 大王辭而不即位 位空之 既經年月

最後の文が空位が年月を経ていると書かれている。空企画では、反正天皇の崩御年は410年で允恭天皇の即位年は413年となっている。

二年二月 立忍坂大中姫 爲 是日爲皇后定刑部

坂大中姫を皇后とした。刑部を定めた。（写本でのミスか?）

三年正月 遣使求良醫於新羅

新羅に良医を求める使いを派遣した。

八月 醫至自新羅 則令治天皇病 未經幾時 病已差也 天皇歡之 厚賞醫以歸于國

医者が新羅から至った。天皇の病を治すように命じた。幾時も経たずに病は良くなった。天皇は歓び厚く賞し国に帰らせた。

五年十一月 葬瑞齒別天皇于耳原陵 瑞齒別天皇を耳原陵に葬った。

八年二月 幸于藤原 密察衣通郎姫之消息

藤原に幸し、衣通郎姫の消息を密かにさぐった。

九年二月・八月・十月・十年正月 幸茅渟

十一年三月 幸於茅渟宮・・・先是衣通郎姫居于藤原宮

茅渟宮に幸した。・・・これより前に、衣通郎姫藤原宮に居た。

コトバンク「茅渟宮」

精選版 日本国語大辞典の解説：**允恭天皇八年、天皇が皇后の嫉妬を避けて衣通姫(そとおりひめ)のために設けた離宮。大阪府泉佐野市上之郷が故地といわれる。八世紀前半、元正天皇も離宮を造営した。**

世界大百科事典内の茅渟宮の言及： **和泉宮の御田苅に必要な食稲**

が和泉郡から支出され，大鳥･日根郡から出ていないこと(天平 10 年和泉監正税帳)，高脚海の珍努(黒鯛)などの賞味も離宮の魅力であったことからみると，離宮の位置は和泉監衙(現，大阪府和泉市府中町御館森)付近と推定される。ちなみに允恭天皇が衣通郎姫のため設けた茅渟宮は猟場の日根野(日根郡)付近にあったと考えられ(日本書紀)，宮跡と称されるものが泉佐野市上之郷にあり，元正天皇の珍努宮の位置は別である。（井上 薫）

十四年九月 天皇獵于淡路嶋　　淡路島で狩りをした。

14 年の記事以降は 23 年と 24 年の記事と崩御の記事のみである。

四十二年正月 天皇崩 時年若干　　天皇が崩御した。

崩御時の年齢が書かれていない。

於是新羅王聞天皇既崩而驚愁之 貢上調船八十艘及種種樂人八十 是泊對馬而大哭 到筑紫亦大哭 泊于難波津 則皆素服之 悉捧御調 且張種種樂器 自難波至于京 或哭泣或□歌 遂參會於殯宮也

ここにおいて、新羅王は天皇の崩御を聞き、驚き愁えた。・・・

十一月 新羅弔使等喪禮既而還之　　新羅の弔使らが喪禮し、帰った。

十月 葬天皇於河内長野原陵　　河内長野原陵に葬った。

淡路嶋が現れるのは、応神天皇紀・履中天皇紀・允恭天皇紀である。反正天皇紀には、淡路嶋ではなく、淡路宮が書かれている。

16.6. 安康天皇紀　穴穂天皇

前文は 481 文字で普通である。

雄朝津間稚子宿禰天皇第二子也 （一云 第三子也） 母曰忍坂大中姫命 稚渟毛二岐皇子之女也

允恭天皇の第 2 子である。(第 3 子ともいう)母は忍坂大中姫命で、稚渟毛二岐皇子の女である。

允恭天皇四十二年正月 天皇崩　 十月 葬禮畢之 是時太子行暴虐 淫于婦女。國人謗之 群臣不從 悉隷穴穂皇子 爰太子欲襲穴穂皇子而密設兵 穴穂皇子復興兵將戰 故穴穂括箭 輕括箭 始 起于此時也 時太子知羣臣不從 百姓乖違 乃出之匿物部大前宿禰之家 穴穂皇子聞則圍之 大前宿禰出門而迎之・・・太子自死于大前宿禰之家（一云 流伊豫國）

允恭天皇 42 年正月に天皇は崩じた。10 月には葬礼が終了した。このとき、太子は暴虐を行い婦女に淫行した。国人はこれを謗り、群臣は従わず、穴穂皇子に悉く従った。太子は穴穂皇子を襲おうと密かに兵を整えた。穴穂皇子は兵將と共に戦った。・・・物部大前宿禰の家に匿れた。・・・太子は大前宿禰の家

で自死した。(伊予国に流されたとも聞く)

Wikipedia「木梨軽皇子」では、**允恭天皇の第一皇子、皇太子であった**、と書かれている。(立太子の記事を見落としたのかもしれない。)

ここでも皇位争いとも考えられる記事が書かれている。しかも、戦闘も書かれている。物部大前宿禰はどちらに属したか。・・・の部分に書かれている穴穂皇子の歌と大前宿禰の答歌からわかるかもしれない。

Wikipedia「物部小前」では、

物部小前(生没年不詳)は、安康天皇の時代の古代豪族物部氏の一族。饒速日命12世の孫とされる。また、先代旧事本紀天孫本紀では物部小前宿祢連公に作り、物部麦入の子で、大前の弟とし、元為大連次為大宿祢 奉斎神宮 と記す。

古事記允恭天皇段で、穴穂御子(安康天皇)が軽太子を捕らえる場面では、大前小前宿祢大臣と大前と1人の人物の如く登場し、初め太子を匿うものの、後に穴穂御子に降る様子が記されている。

と書かれている。

また、Wikipedia「木梨軽皇子」では、

允恭天皇の第一皇子、皇太子であった。母は皇后の忍坂大中津比売命。同母弟に穴穂皇子、大泊瀬稚武皇子(雄略天皇)など。
古事記によれば、允恭23年立太子するも、同母妹の軽大娘皇女と情を通じ、それが原因となって允恭天皇の崩御後に廃太子され伊予国へ流される。その後、あとを追ってきた軽大娘皇女と共に自害したといわれる(衣通姫伝説)。また日本書紀』は、情を通じた後の允恭 24年に軽大娘皇女が伊予国へ流刑となり、允恭天皇が崩御した允恭 42年に穴穂皇子によって討たれたとある。

四国中央市にある東宮古墳が木梨軽皇子の墓といわれ、宮内庁陵墓参考地とされている。
と書かれている。

伊予国と物部氏が現れるのは興味ある。なお、允恭天皇紀には立太子の記事を見い出していない。

十二月 穴穂皇子即天皇位 尊皇后曰皇太后 則遷都于石上 是謂穴穂宮

穴穂皇子は即位した。皇后を皇太后に尊し、石上に遷都した。これが穴穂宮である。

當是時 大泊瀬皇子欲聘瑞齒別天皇之女等 （女名不見諸記） 於是皇女等皆對曰 君王恒暴強也・・・

ここにおいて、大泊瀬皇子は瑞齒別天皇の女らを聘いた。（女の名は見当たらない）皇女らは皆こたえて言った。君王は恒に強暴である・・・

記年記事は次の 3 つである。

元年二月 天皇爲大泊瀬皇子 欲聘大草香皇子妹幡梭皇女 ・・・

天皇は大泊瀬皇子に大草香皇子妹幡梭皇女を聘くことを望んだ。

この記事も少し長く理解できていない。

いつものように、Wikipedia「安康天皇」から引用する。

允恭天皇 42 年 1 月に雄朝津間稚子宿禰天皇(允恭天皇)が崩御。皇太子の木梨軽皇子には近親相姦の前科が有ったため群臣は従わず、同母弟の穴穂皇子を推戴した。木梨軽皇子は群臣が離反していく不利な現況を悲嘆して物部大前宿禰の館に潜んだ。そこで穴穂皇子は兵を率いて館を包囲。大前宿禰の計らいで戦は避けられたが軽皇子

は自裁した（古事記では伊余湯に流罪となったと記される)。穴穂皇子は 12 月に践祚。

即位元年、天皇は大泊瀬皇子の妃探しがうまくいかないのを見て、おばの草香幡梭姫皇女(仁徳天皇の皇女)を見合わせようと考えた。そこで根使主を皇女の兄の大草香皇子へ遣わし、その意を伝えさせた。大草香皇子は心から喜び感謝して四回も頭を下げ、言葉だけを返すのは無礼だとすら考え根使主に宝石と金で飾った冠を持たせた。しかし根使主は宝の美しさに目がくらんで着服し、大草香皇子は縁談を断ったうえ刀を抜き怒った、という讒言を行った。これを信じた激怒した天皇は大草香皇子を誅殺し、翌年に大草香皇子の妃であった中蒂姫を妃とした。

二年正月 立中蒂姫命爲皇后　　中蒂姫命を皇后とした。

三年八月 天皇爲眉輪王見弑（辭具在大泊瀬天皇紀） 三年後 乃葬菅原伏見陵

眉輪王に弑された 3 年後菅原伏見陵に葬った。

Wikipedia「眉輪王」では、

眉輪王(允恭天皇 39 年(450 年) - 安康天皇 3 年(456 年)8 月)は、

記紀に伝えられる5世紀頃の皇族(王族)。古事記では目弱王と表記。父は仁徳天皇の皇子である大草香皇子、母は履中天皇の皇女である中蒂姫命。

記紀によれば、父の大草香皇子が罪無くして安康天皇に誅殺された後、母の中蒂姫命は安康天皇の皇后に立てられ、眉輪王は連れ子として育てられた。安康天皇 3 年(456 年)8 月、年幼くして(古事記では7歳)楼の下で遊んでいた王は、天皇と母の会話を残らず盗み聞いて、亡父が天皇によって殺されたことを悟り、熟睡中の天皇を刺殺する(眉輪王の変)。その後、坂合黒彦皇子と共に円大臣の宅に逃げ込んだが、大泊瀬皇子(後の雄略天皇)の兵に攻められ、大臣の助命嘆願も空しく、諸共に焼き殺されたという。

16.7. 雄略天皇紀　大泊瀬幼武天皇

前文は 1077 文字で、やや長い。始めのほうに次が書かれているが、理解できていない。

安康天皇三年 456 八月 穴穂天皇意將沐浴 幸于山宮 遂登樓兮 遊目因命酒兮肆宴 爾乃情盤欒極 間以言談 顧謂皇后(去來穗別天皇女曰中蒂姫皇女 更名長田大娘皇女也 大鷦鷯天皇子大草香皇子 娶長田皇女生眉輪王 也 於後穴穂天皇用根臣讒 殺大草香皇子 而立中蒂姫皇女爲皇后 語在穴穂天皇紀也)曰 吾妹 (稱妻爲妹 盖古之俗乎) 汝雖親昵 朕畏眉輪王 眉輪王幼年遊戲樓下 悉聞所談 既而穴穂天皇枕皇后膝 晝醉眠臥 於是 眉輪王伺其熟睡而刺殺之

穴穂天皇(安康天皇)は沐浴をしようと、山宮に幸し、樓に登った。・・・穴穂天皇は根臣の讒言を信じ、大草香皇子を殺した。・・・穴穂天皇は皇后の膝を枕に、酔って眠った。ここで、眉輪王は熟睡中の天皇を刺し殺した。

この記事の、系譜を除いた内容については前節で述べたと思っている。

大草香皇子は仁徳天皇の皇子であるから、安康天皇には伯父にあ

たる。伯父の大草香皇子を殺し、従兄弟の眉輪王に殺されたことになる。これは、親族間の殺戮である。

また、履中天皇の皇后である中磯皇女＝長田大娘皇女は履中天皇の皇女ということから、市辺押磐皇子とは兄妹で、大草香皇子からは姪となる。雄略天皇の皇后である草香幡梭姫皇女は大草香皇子の同母妹と書かれている。

今の感覚では近親相姦ではないかと疑えるような系譜である。兄妹婚といっても、異母兄弟ならば、血縁的には従兄弟婚に相当する。ここで、蛭児の話が浮かんできた。

Wikipedia「ヒルコ」では、

古事記において国産みの際、伊耶那岐命と伊耶那美命との間に生まれた最初の神。しかし、子作りの際に女神である伊耶那美命から先に男神の伊耶那岐命に声をかけた事が原因で不具の子に生まれたため、葦船に入れられオノゴロ島から流されてしまう。次に生まれた淡嶋と共に、二神の子の数には入れないと記されている。棄てられた理由について古事記では伊耶那岐命・伊耶那美命二神の言葉として、わが生める子良くあらず、とあるのみで、どういった子であったかは不明。

後世の解釈では、水蛭子とあることから水蛭のように手足が異形であったのではないかという推測を生んだ。あるいは、胞状奇胎と呼ばれる形を成さない胎児のことではないかとする医学者もある。

日本書紀では三貴子の前に生まれ、必ずしも最初に生まれる神ではない。書紀では、伊耶那美命が伊耶那岐命に声をかけ、最初に淡路洲、次に蛭児を生んだが、蛭児が三歳になっても脚が立たなかったため、天磐櫲樟船に乗せて流した、とする。中世以降に起こる蛭子伝説は主にこの日本書紀の説をもとにしている。

始祖となった男女二柱の神の最初の子が生み損ないになるという神話は世界各地に見られる。特に東南アジアを中心とする洪水型兄妹始祖神話との関連が考えられている。

という話である。

安康天皇三年 456 十月　天皇恨穴穂天皇曾欲以市邊押磐皇子傳國而遥付囑後事

（雄略）天皇は穴穂天皇が曾て市邊押磐皇子に国を伝え後事を託すことを望んだことを恨んだ。

この後に、・・・**即射殺市邊押磐皇子**・・・があるが、前後とも理

解できていない。

十一月 天皇命有司設壇於泊瀬朝倉即天皇位 遂定宮焉 以平群臣眞鳥爲大臣 以大伴連室屋 物部連目爲大連

天皇は泊瀬朝倉に壇を設けるよう有司に命じ、即位した。そこを宮に定めた。平群臣眞鳥を大臣に、大伴連室屋と物部連目を大連とした。

ここまでが前文である。即位に設壇は初めてではないか。大臣・大連の選任も同様である。

西暦は作業仮説 IV01「雄略天皇六年は 462 年であり、雄略天皇元年は 457 年である」によるものである。これは空企画に依るものと同じである。これは、日本書紀の作者は呉を中国の王朝と意識していたことを物語るのではないかと考える。

元年 457 三月 立草香幡梭姫皇女爲皇后〈更名橘姫〉

草香幡梭姫皇女を皇后とした。(橘姫ともいう。)

是月 立三妃 元妃葛城圓大臣女曰韓媛 生白髮武廣國押稚日本根子天皇 與稚足姫皇女(更名栲幡娘姫皇女)是皇女侍伊勢大神祠。次有吉備上道臣 女稚媛(一本云 吉備窪屋臣女)生二男 長曰磐城皇子 少曰

星川稚宮皇子(見下文)次有春日和珥臣深目女 曰童女君 生春日大娘皇女(更名高橋皇女)

この月に3人を妃とした。(妃と生んだ子が書かれている)

二年 458 七月 百濟新撰云 己巳年 蓋鹵王立 天皇遣阿禮奴跪來索女郎 百濟莊飾慕尼夫人女曰適稽女郎 貢進於天皇

百濟新撰では。己巳年に蓋鹵王が立った。・・・

「○○云」は神功皇后紀と応神天皇記につぐ使用例である。この2例では作業仮説を設定した。盖鹵王の在位期間は 455 年から 475 年であるから、即位年は 455 年である。百濟新撰云 己巳年 蓋鹵王立は記事の説明でいれられたとすれば、盖鹵王の即位は己巳年のことで、雄略天皇2年とは異なると解釈できる。

ここまでで、「○○云」に続く記事の西暦は云っている元の記事とほぼ合っている。なお、神功皇后紀では、魏志、百濟記、晉起居注が使われ、応神天皇紀では百濟記のみが使われている。

十月 幸于吉野宮 幸御馬瀬 命虞人縱獵

吉野宮に幸した。御馬瀬にいったとき、虞人に狩りを命じた。

広辞苑無料検索によると、学研漢和大字典 ページ 6012 での【虞人】では、**官名。山林や沼沢のことをつかさどった。「招虞人以旌=虞人を招くに旌を以てす」〔孟子・滕下〕と書かれている。**

是月 置史戸 河上舎人部　　史戸を河上舎人部に置いた。

Wikipedia「史部」では。

史部とは、古代日本において文書や記録の作成など文筆をもって奉仕した氏族。史部には文筆をもって奉仕した氏族の人々を指す場合とその部民（史戸）を含めて指す場合があるため注意を必要とする。

史部は知られている限りにおいて 70 氏ほど存在が確認されているが、全て中国もしくは朝鮮半島からの渡来人系であり、そのうち 70 氏余りいた史部全体を統率した東漢氏は直、西文氏は首の姓を与えられた他は史の姓を与えられていた。律令制の下においても専門家の子孫として子弟に対する大学寮への入学資格が優先的に与えられるなどの待遇を受けた。

四年 460 二月 天皇射獵於葛城山　八月 行幸吉野宮

葛城山で猟をした。吉野宮に幸した。

幸于河上小野 命虞人駈獸

河上小野にいったとき、虞人に獣を駈けるように命じた。

五年 461 二月 天皇狡獵于葛城山 葛城山で猟をした。

四月 百濟加須利君(盖鹵王也) 飛聞池津媛之所燔殺(適稽女郎也) 而籌議曰 昔貢女人爲采女 而既無禮 失我國名 自今以後不合貢女 乃告其 弟軍君(崑支君也)曰 汝宜往日本以事天皇 軍君對曰 上君之命不可奉違 願賜君婦而後奉遣 加須利君則以孕婦 既嫁與軍君曰 我之孕婦既當産月 若於路産 冀載一船 隨を至何處速令送國 遂與辭訣 奉遣於朝

百濟加須利君(盖鹵王である)・・・(理解できていない)

六月 孕婦果如加須利君言 於筑紫各羅嶋産兒 仍名此兒曰嶋君 於是 軍君即以一船送嶋君於國 是爲武寧王 百濟人呼此嶋曰主嶋也

孕婦は加須利君にいった。筑紫の各羅嶋で児を産んだ。嶋君と名付けた。軍君は船を一艘仕立て、嶋君を国に送った。これが武寧王である。

21 代盖鹵王の在位期間は 455 年から 475 年で、25 代武寧王の在位期間は 502 年から 523 年まで。

七月 軍君入京 既而有五子 （百濟新撰云 辛丑年盖鹵王遣王遣弟昆支君 向大倭侍天皇 以脩先王之好也）

軍君は入京した。すでに５人の子があった。百済新撰では、盖鹵王が王の遣弟昆支君を大倭に向かわせ・・・(?)。

上記五年の記事の訳を兼ねて、Wiki「昆支王」を引用する。

昆支王(- 477 年 7 月)は、百済の王族。三国史記によれば、第 21 代蓋鹵王の子で 22 代文周王の弟であり、24 代東城王の父。日本書紀では、蓋鹵王の弟で、東城王と武寧王の父である。昆伎、昆枝、崑枝、崑支、軍君。

日本書紀によると、雄略天皇 5 年(461 年)4 月、兄の加須利君(蓋鹵王)により日本に遣わされた。その際、蓋鹵王の夫人を一人賜り、身籠っていたその夫人が 6 月に筑紫の各羅嶋(加唐島)で男児を産んだ。この男児は嶋君(斯麻)と名付けられて、母子ともに百済に送り返され、後の武寧王となった。7 月宮廷に入ったが、この時既に 5 人の子があった。雄略天皇 23 年(479 年)4 月、百済の文斤王(三斤王)が急死したため、昆支王の 5 人の子供のなかで、第 2 子の末多王が幼少ながら聡明だったので、天皇は筑紫の軍士 500 人を付けて末多王を百済に帰国させ、王位につけた。これが東城王である、という。

新撰姓氏録では、飛鳥戸氏の祖とされ、大阪府羽曳野市の飛鳥戸神社に祭神として祀られている。

三国史記の 百済本紀文周王には、文周王 3 年(477 年)4 月に、王の弟の昆支を拝し内臣佐平と為す、とあるが、同年 7 月に、内臣佐平の昆支卒す、とある。

また、宋書百済伝に、百済王余慶(蓋鹵王)が大明 2 年(458 年)に宋に上表文を提出し、百済の将軍 11 名が宋から将軍号を認められているが、その中の征虜将軍の号を受けた左賢王余昆を、昆支王と同一人物とする説もある。

Wiki「左賢王」では

左賢王は古代の北アジアから中央アジアにかけて存在した遊牧国家、匈奴の国制における地位・称号の一つ。匈奴では右賢王と共に単于に次ぐ地位である。

匈奴は中国の制度に当てはめれば皇帝に当たる単于がおり、その下に左右賢王、左右谷蠡王、左右大将、左右大都尉、左右大当戸、左右骨都侯といった地位があった。それぞれ 1 万騎から数千騎を擁し、全部で 24 の長があった。左右賢王はその中でも最も地位が高く、国も最大である。24 の長の下には千長、百長、什長、裨小王、相、都

尉、当戸、且渠といった部下がいた。

**　左賢王は単于の後継ぎが就く地位であり、中国の制度で言えば皇太子である。**

**　左右賢王の賢は匈奴の言葉の「屠耆」を翻訳したものである。**

**　王以下の左と付く地位の者は東方に陣取った。**

と書かれている。

六年 462 二月　天皇遊乎泊瀬小野　　泊瀬小野で遊んだ。

四月　呉國遣使貢獻　　呉國に使いを送り貢獻した。

　この記事から作業仮説 IV01 を得た。

七年八月　官者吉備弓削部虚空取急歸家　吉備下道臣前津屋（或本云國造吉備臣山）留使虚空　經月不肯聽上京都　天皇遣身毛君丈夫召焉虚空被召來　言　前津屋以小女爲天皇人　以大女爲己人　競令相闘　見幼女勝　即刀而殺　復以小雄鷄呼爲天皇鷄　拔毛剪翼　以大雄鷄呼爲己鷄　著鈴金距　競令闘之　見禿　鷄勝　亦拔刀而殺　天皇聞是語　遣物部兵士卅人　誅殺前津屋并族七十人

　理解できていない。Wikipedia「吉備下道前津屋」記録では、

日本書紀巻第十四によると、官者(舎人)の吉備弓削部虚空は取り急ぎ家に帰った。吉備下道臣前津屋は、虚空を留め置いて、何ヶ月経っても都へ戻ることを許さなかった。雄略天皇は身毛君丈夫を遣わして、召し出すことに成功した。そして、虚空が申し上げるには、前津屋は小女を天皇に見立て、大女を自分にして、競わせて互いに闘わせています。幼女が勝ったら、これを殺しています。また小さい鶏を天皇の鶏にして、毛を抜いて羽を切り、自分の方の鶏には鈴や金の距をつけて闘わせています。毛が潰れて丸い頭になった鶏が勝つとまた大刀を抜いて殺します。天皇はこの話を聞いて、物部の兵士 30 人を派遣して、前津屋と併せて一族 70 人を誅殺した。

とかかれ、ほぼ訳である。

京都は何処か。前文の記事から、宮は泊瀬朝倉宮。京都は今の所初の使用例。

是歳 吉備上道臣田狭侍於殿側 盛稱稚媛於朋友曰・・・天皇傾耳 遥聽而心悦焉 便欲自求稚媛爲女御 拜田狭爲任那國司 俄而天皇幸稚媛 田狭臣娶稚媛而生兄君 弟君也

この年、吉備上道臣田狭は殿側に侍った。盛稱稚媛が朋友にいった：・・・

この記事の稚媛と元年の３妃の稚媛との関係は。

これも、Wikipedia「吉備下道前津屋」記録では、

日本書紀によると、田狭は宮殿のかたわらで、朋友に盛んに自身の妻、稚媛の美貌を以下のように褒め称えた、という。・・・これに耳を傾けて聞いていた雄略天皇は、稚媛を女御にしようと望んだ。田狭を任那国司に任命し、その留守中に、稚媛を後宮に入れてしまった。

これには次が続いている。

この出来事を聞いた田狭は、援助を求めに新羅に入国しようと思った。田狭と稚媛との間には、既に成人した二人の息子がいた。その後、天皇はその田狭の子の一人である弟君を吉備海部直赤尾とともに新羅討伐に派遣したが、息子が新羅を討たずに朝鮮半島に滞在したままであることを父親である田狭は喜んだ。彼は秘密裏に百済に人を遣わして、弟君を戒め、「お前の首はどれだけ固く、人を討てるというのか、伝え聞くところでは、稚媛と天皇との間には子供が居るらしい」と伝えた。そして、百済で自立し、大和朝廷から離叛することを勧め、自分は任那から日本へは通うまいと伝えた。しかし、その事が原因で弟君は朝廷への信奉の念の強い妻の樟媛によって人知れ

ず殺され、寝室の中に埋められてしまった、という。

これは抄訳になると思われる。

八年 464 二月 遣身狹村主青 桧隈民使博徳使於呉國 自天皇即位至于是歳 新羅國背誕 苞苴不入 於今八年 而大懼中國之心 脩好於高麗 由是高麗王 遣精兵一百人 守新羅・・・

身狹村主青と桧隈民使博徳を呉國へ使わせた。天皇が即位してからこの年まで新羅國は背き、誕苞苴に入れないこと八年である。中国の心を大いに懼れ、高麗と修好した。これより、高麗王は精兵一百人を派遣し新羅から(を)守った。・・・

正史には 464 年に朝貢の記事は無い。六年より八年を基準とすべきか。この続きで、かなり(486 文字)の文が書かれているが理解できていない。

九年 465 二月 遣凡河内直香賜與采女 祠胸方神 香賜與采女既至壇所(香賜 此云舸□夫)及將行事

河内直香賜と采女を胸方神を祭るために派遣した。香賜と采女壇所に着いた。

胸方は宗像、漢字の訓読み地名。 ？ 凡が理解できていない。

三月 天皇欲親伐新羅 神戒天皇曰 ・・・

天皇は親征し新羅を伐つことを望んだ。神は天皇を戒めていった：・・・

少し長い ・・・ は理解出来ていない。

五月 紀大磐宿禰聞父既薨 乃向新羅 執小鹿火宿禰所掌兵馬船官及諸小官 専用威命 於是 小鹿火宿禰深怨乎大磐宿禰 乃詐告於韓子宿禰曰

紀大磐宿禰は父が既に薨かったと聞いたが、新羅に向かった。小鹿火宿禰の掌る兵馬、船官と諸小官を執り、専用した。

十年 466 九月 身狹村主青等將呉所獻二鵝到於筑紫 是鵝爲水間君犬所囓死

身狹村主の青らは呉の献ずる二鵝をともなって筑紫に到った。・・・

身狹村主青は八年二月の記事の者。

十月 水間君所獻養鳥人等安置於輕村磐余村二所

水間君は献じられた養鳥人らを、輕村と磐余村の二ヶ所に置いた。

十一年 467 近江國栗太郡言 白□□居于谷上濱 因詔置川瀬舍人

近江国の栗太郡が次のように言った： 谷上濱に白い□□がいる。そこに川瀬舍人を招き置いた。

七月 有從百濟國逃化來者 自稱名曰貴信 又稱 貴信呉國人也 磐余呉琴彈□手屋形麻呂等。是其後也

百濟國を逃れ化來したものがいた。その者は貴信と名乗った。または貴信呉國人ともいった。磐余の呉琴彈の□手屋形麻呂らはその末裔である。

この頃、百済は高句麗に圧されていた。475 年には熊津に遷都。

十二年 468 四月 身狹村主青與桧隈民使博徳出使于呉

身狹村主青と桧隈民使博徳は呉に出使した。

十月 天皇命木工鷄御田（一本云 猪名部御田 盖誤也）始起樓閣

木工の鷄御田(猪名部で御田は誤りともいう)に命じ、樓閣を始めて起こした。

十三年八月 播磨國御井隈人文石小麻呂有力強心 肆行暴虐

播磨国の御井隈人の文石小麻呂は有力強心で、暴虐を行った。

十四年 470 正月 身狹村主青等共呉國使 將呉所獻手末才伎漢織 呉織及衣縫兄媛 弟媛等 泊於住吉津

身狭村主青らと呉國の使いは・・・

是月 爲呉客道通磯歯津路 名呉坂

この月、呉客を磯歯津路を通させた。これを呉坂と名付けた。

三月 命臣連迎呉使 即安置呉人於桧隈野 因名呉原

臣連に呉使を迎えることを命じた。呉人を桧隈野に安置した。これを呉原と名付けた。

雄略天皇紀にある呉は宋か。十二年に五王の朝貢が対応するか。呉(国)使 は本当だろうか。宋書の倭条には倭に使いを送った話は書かれていない。

四月 天皇欲設呉人 歴問群臣曰 其共食者誰好乎 ・・・

天皇は呉人を設けることを望んだ。群臣に歴問した: ・・・

十五年 471 秦民分散 臣連等各随欲駈使 勿委秦造 由是秦造酒甚以爲

秦民が分散した。臣連らは（後は理解できず）

十六年十月 詔 聚漢部 定其伴造者 賜姓曰直 （一本云 賜漢使主等賜姓曰直）

漢部を集め、その伴造を定め、姓の直を与えた。

十七年三月 詔土師連等使進應盛朝夕御膳清器者

土師連等に(理解できていないが、日常の食器を造らせたのでは)

十八年 474 八月 遣物部菟代宿禰 物部目連 以伐伊勢朝日郎 以伐伊勢朝日郎 朝日郎聞官軍至 即逆戰於伊賀青墓 自矜能射 謂官軍曰

物部菟代宿禰と物部目連を派遣し、伊勢朝日郎を伐った。・・・

十九年 475 三月 詔置穴穂部 穴穂部を設置した。

廿年 476 高麗王大發軍兵 伐盡百濟爰有少許遺衆 聚居倉下 兵粮既盡 憂泣茲深 於是高麗諸將言於王曰 百濟心許非常 臣每見之 不覺自失 恐更 蔓生 請遂除之 王曰 不可矣 寡人聞 百濟國者 爲日本國之官家 所由來遠久矣 又其王入仕天皇 四隣之所共識也 遂止之 (百濟記云 盖鹵王乙卯年冬 狛大軍來 攻大城七日七夜 王城降陷 遂失尉禮國 王及大后王子等皆沒敵手)

高麗王は大軍を発し、百済をことごとく伐った。・・・

・・・は、百済を破ることと高麗から見た倭と百済の関係

百済とは友好的、むしろ、百済が倭を頼っている。百済は高句麗に侵略されていた。済済と新羅とは交戦が多い。新羅が倭の跡地を侵略することが原因か。

476 年での高句麗の王は 20 代長寿王の六十一年。有名な広開土王は、その前の 19 代で在位期間は 391 年から 413 年である。

廿一年 477 三月 天皇聞百濟爲高麗所破 以久麻那利賜□洲王 救興其國 時人皆云 百濟國雖屬既亡聚夏倉下 實賴於天皇 更造其國 （□洲王盖鹵王母弟也 日本舊記云 以久麻那利賜末多王 盖是誤也 久麻那利者任那國下□呼□縣之別邑也）

天皇は百済が高麗に破れたことを聞いた。久麻那利を□洲王に与え、百済を救った。・・・。（□洲王は盖鹵王母の弟である。・・・。久麻那利は任那國の下□呼□縣の別邑である。）

百済本記では、王は文周王 475-477 三斤王 477-479 となっている。記事では

蓋鹵王二十一年 475 麗王巨璉 帥兵三萬 來圍王都漢城

が対応するのか。高句麗本紀では

長壽王五十七年 472 百濟兵侵入南鄙

があるが、対応するような百済を破った記事は見当たらない。

廿二年正月 以白髮皇子爲皇太子 白髮皇子を皇太子とした。

廿三年 479 四月 百濟文斤王薨 天皇以昆支王五子中 第二末多王幼年聰明 勅喚内裏 親撫頭面誡勅慇懃 使王其國 仍賜兵器 并遣筑紫國軍士五百人 衞送於國 是爲

百濟文斤王が薨かった。昆支王の 5 子のうち、2 番目の末多王が幼い時から聰明であったため、・・・、百済の王とし、兵器を賜い、筑紫國の軍士五百人を派遣し、百済に送り、東城王とした。

昆支王は文周王の弟。百済本記では、文斤王はなく、東城王の前は文周王 475-477 と三斤王 477-479 となっている。作業仮説 VI01 からは 479 年で、後者に一致する。

是歲 百濟調賦益於常例 筑紫安致臣 馬飼臣等 率船師以擊高麗

この年、百濟は通り調賦益した。筑紫の安致臣と馬飼臣らは船師を率いて高麗を撃った。

八月 崩于大殿 大殿にて崩じた。

崩御時の年齢が書かれていない。

Wiki「昆支王」は既に引用した。Wiki「東城王」では

治世: 王位につくと直ちに、文周王を暗殺させた解仇の反乱を収めた真老を徳率(4等官)から兵官佐平(1等官)に昇進させ、内外の統帥権を委任した。また、首都熊津(忠清南道公州市)の在地勢力である燕氏、沙氏を重用して既存の政治体制を改革しようとした。対外的には、高句麗の長寿王が北朝だけではなく南朝にも朝貢して爵号を得たことを聞き、百済からも南斉に朝貢して冊封体制下に入ったが、高句麗の得た爵号に対しては評価の低いものに留まった。新羅との同盟(羅済同盟)を結ぶための使者の派遣も行っており、493年には通婚を要請して、新羅からは伊飡(2等官)の娘が嫁いできた。翌494年には高句麗が新羅を攻めたところに救援を送って高句麗兵を退け、さらに 495 年には高句麗に侵入された際には新羅から救援が来て高句麗兵を退けている。このように新羅との同盟で高句麗に対抗する姿勢をとっていたが、501年7月には新羅に対しても警戒して炭?に城柵を築いた。498年8月には、耽羅(済州島)が貢賦を納めなくなったので親征のために武珍州(現在の光州広域市)に赴いた。これを聞いて耽羅は使者を送ってきて謝罪し、以後は百済に服属したとみられる。倭国との関係では、東城王の即位以前に起きた二度にわたる百済と高句麗の戦い(455年と475年)において、古くからの同盟国である

にも関わらず倭国が百済を支援しなかったことを背景に東城王は倭国に対しては非友好的な態度を取っている。

王権と国力の回復に努め、外征にも成果を挙げた東城王であったが、在位の晩年には暗君と化した。499年に大旱魃が起こって国民が餓えたが、国倉を開いて民に施そうとするのを許さず、漢山(京畿道広州市)の民2千人が高句麗領に逃亡した。それにも拘らず500年には王宮の東に高さ 5 丈もの臨流閣を築き、池を掘り珍しい鳥を飼うなどの贅沢にふけり、諫言をする臣下を遠ざけた。さらに同年にも旱魃があったが、側近とともに臨流閣で一晩中の宴会をするなどしていた。こうした状況のなかで501年11月、衛士佐平の苩加の放った刺客に刺され、12月に死去した。諡されて、東城王という。

Wikipedia「雄略天皇」に次の記事がある。

日本書紀の暦法が雄略紀以降とそれ以前で異なること、万葉集や日本霊異記の冒頭にその名が掲げられていることから、この天皇の時代が歴史的な画期であったと古代の人々が捉えていたことが窺える。それまでの倭国は各地の有力豪族による連合体であったが、雄略の登場により天皇による統治が確立され、天皇を中心とする中央集権体制が始まったとする見方もある。

16.8. 清寧天皇紀　白髮武廣國押稚日本根子天皇

前文は576文字でやや長い。

雄略天皇廿三年八月 大泊瀬天皇崩 吉備稚媛陰謂幼子星川皇子曰 欲登天下之位 先取大藏 之官 長子磐城皇子 聞母夫人教其幼子之語曰 皇太子雖是我弟 安可欺乎 不可爲也 星川皇子不聽 輙隨母夫人之意 遂取大藏官

是月 吉備上道臣等聞朝作亂 思救其腹所 生星川皇子 率船師册艘來浮於海 既而聞被燔殺 自海而歸 天皇即遣使嘖讓於上道臣等 而奪其所領山部

上記記事は理解できていない。訳を兼ねて Wiki「星川稚宮皇子」から引用する。

雄略天皇は吉備上道臣田狭が自分の妻・稚媛の美しさを自慢するのを聞いて、田狭を任那の国司として派遣した後で、稚媛を奪って妃とした。こうして磐城皇子と星川皇子が生まれた。ところが、雄略天

皇は星川皇子を皇位につけてはならないと、大連の大伴室屋と東漢掬直に遺詔した。そのことが原因で、稚媛は雄略天皇が死ぬと、星川皇子に反乱を起こすよう説いた。星川皇子は母の言葉に従い、反乱を起こし、大蔵を占領した。しかし、室屋らによって大蔵に火を放たれ、星川皇子と稚媛のほか異父兄の兄君(田狭と稚媛の子)など従った者の多くが焼き殺された。吉備上道臣氏は星川皇子を助けようと軍船40 隻を率いて大和に向かったが、殺されたことを聞いて途中で引き返した。即位前の清寧天皇はこれを非難して、吉備上道臣が管理している山部を召し上げたという。

田狭と稚媛のあいだには、兄君・弟君が生まれた。彼らと磐城皇子・星川皇子は異父兄弟となる。兄弟であることと、弟が目立っているという点では、次の顕宗天皇・仁賢天皇と似ている。両者に関係は有るのか無いのか。

十月 大伴室屋大連率臣連等 奉璽於皇太子

大伴室屋大連は臣連らを率いて、璽を皇太子に奉げた。

元年正月 命有司 設壇場於磐余甕栗陟天皇位 遂定宮焉 尊葛城韓媛

爲皇太夫人 以大伴室屋大連爲大連 平群眞鳥大臣爲大臣 並如故 臣連伴造等各依職位焉

天皇は磐余甕栗に壇を設けるよう有司に命じ、即位した。そこを宮に定めた。葛城韓媛を皇太夫人とし、大伴室屋大連を大連とし、平群眞鳥大臣を大臣とした。同じように、臣連伴造らもその職位に再任した。

雄略天皇と同様に、設壇と大連・大臣の選定が即位時に行われた。

雄略天皇は平群臣眞鳥を大臣に、大伴連室屋と物部連目を大連とした。共に就位時に行っている。これは百済や高句麗ではよくみられる。

十月 葬大泊瀬天皇于丹比高鷲原陵

大泊瀬天皇を丹比高鷲原陵に葬った。

二年二月 天皇恨無子 乃遣大伴室屋大連於諸國

天皇は子の無いことを恨んだ。大伴室屋大連を諸国に派遣した。

十一月 依大嘗供奉之料 遣於播磨國司山部連先祖伊與來目部小楯於赤石郡縮見屯倉首忍海部造細目新室 見市邊押磐皇子子億計 弘計

大嘗に供奉するため、播磨國司山部連の先祖伊與來目部小楯を赤石郡縮見屯倉首忍海部造細目新室に市邊押磐皇子の子億計と弘計を見るため派遣した。

是月 使小楯持節將左右舍人 至赤石奉迎 語在弘計天皇紀

この月、小楯に左右舍人を引き連れて使者とした。

三年正月 小楯等奉億計 弘計 到攝津國

小楯らは億計・弘計を奉って攝津國に到った。

四月 以億計王爲皇太子 以弘計王爲皇子

億計王を皇太子とし、弘計王を皇子とした。

七月 飯豐皇女於角刺宮與夫初交

飯豐皇女は角刺宮において夫と初めて交わった。

十一月 飯豐青尊崩 葬葛城埴口丘陵

飯豐青尊が崩じた。葛城埴口丘陵に葬った。

五年春正月 天皇崩于宮 時年若干

十一月 葬于河内坂門原陵

これが清寧天皇紀の記年記事のおもなものである。まるで億計 弘計を見つけ、都に迎えるためのようである。顕宗天皇・仁賢天皇を系譜に入れるために、縮小されたのかもしれない。

和風諡号は、見出しでは、白髮武廣國押稚日本根子天皇と書かれているが、顯宗天皇紀前文では、白髮天皇と略されている。

16.9. 飯豊青皇女

空企画では菟道稚郎子と同様に(執政)となっている。

これまでに確認できた、飯豊青皇女に関する記事は次の 2 つである。

清寧天皇の記事

清寧天皇三年七月 飯豐皇女於角刺宮與夫初交

三年十一月 飯豐青尊崩 葬葛城埴口丘陵

顕宗天皇紀前文には、

清寧天皇五年正月 白髮天皇崩 皇太子億計王與天皇讓位。 久而不處。

由是天皇姉飯豐青皇女於忍海角刺宮臨朝秉政

十一月 飯豐青尊崩 葬葛城埴口丘陵

ここで、飯豐皇女に崩が用いられている。また、崩御年に関しては、清寧天皇では清寧天皇三年で顕宗天皇紀前文では清寧天皇五年で清寧天皇崩御後となっている。

顕宗天皇紀前文では、3 年正月に億計王を皇太子とする経緯が書かれているが、この話は清寧天皇紀にあるのが妥当と考える。

飯豐青皇女の記事に戻ろう。於角刺宮與夫初交 以外の記事は、於忍海角刺宮臨朝秉政 と崩御と陵の記事である。臨朝秉政 を摂政となったとされている。神功皇后紀でも 群臣尊皇后曰皇太后 是年也太歳辛巳 則爲攝政元年 と書かれていて、摂政となったとは書かれていない。これを念頭において摂政を用いることにする。

摂政の記事としては骨と皮、あるいは、お骨だけと言えよう。抹消せずに、お骨だけとはいえ、残しているのは何故だろうか。逆に考えれば、書きたくなかったことは何だろうかを探ることになる。

本稿の立場からは、書きたくなかったのは吉備王朝、すなわち、吉備にあった倭王朝(邪馬台国)と考える。日本書紀では、西から東への征服は、神武天皇紀に書き、他は近畿から征服したことになっている。

16.10. 顕宗天皇紀　弘計天皇

前文は2030文字で、かなり長い。目に付くものを挙げていく。

(更名來目稚子)大兄去來穗別天皇孫也 市邊押磐皇子子也

（來目稚子ともいう）履中天皇の孫で、市邊押磐皇子の子である。

市邊押磐皇子娶蟻臣女□媛 遂生三男二女 其一曰居夏姫 其二曰億計王 更名嶋稚子 更名大石尊 其三曰弘計王 更名來目稚子 其四曰飯豐女王 亦名忍海部女王 其五曰橘王

市邊押磐皇子は蟻臣の女の□媛を娶り、三男二女を設けた。・・・

安康天皇三年十月 天皇父市邊押磐皇子及帳内佐伯部仲子 於蚊屋野爲大泊瀬天皇見殺 因埋同穴 於是 天皇與億計王聞父見射 恐懼皆逃亡自匿 帳内日下 部連使主 (使主日下部連之名也 使主 此云於瀰)與其子吾田彦(吾田彦 使主之子也) 竊奉天皇與億計王 避難於丹波國余社郡 使主遂改名字曰田疾來 尚恐見誅 從茲遁入播磨國縮見山石室而自經死 天皇尚不識使主所之 勸兄億計王向播磨國赤石郡

この２つの記事の理解も不十分なので、Wiki「顕宗天皇」の記事を

引用する。

安康天皇3年10月1日父の市辺押磐皇子が大泊瀬皇子に殺されると、兄の億計王と共に逃亡して身を隠した。丹波国与謝郡に行き、後に播磨国明石郡や美嚢郡の志染の石室に隠れ住む。兄弟共に名を変えて丹波小子と名乗り、縮見屯倉首に使役され、長い間牛馬の飼育に携わっていた。清寧天皇2年11月、弘計王自ら新室の宴の席で、歌と唱え言に託して王族の身分を明かした。子がなかった清寧天皇はこれを喜んで迎えを遣わし、翌年2王を宮中に迎え入れて、4月7日(5月10日)に兄王を皇太子に、弘計王を皇子とした。

同5年1月16日に清寧が崩御した後、皇太子の億計は身分を明かした大功を理由として弟の弘計に皇位を譲ろうとするが、弘計はこれを拒否。皇位の相譲が続き、その間は飯豊青皇女が執政した(古事記では、2王が身分を明かして宮中に戻ったのは清寧の崩御後、飯豊王の執政中のことであるとする)。結果的に兄の説得に折れる形で顕宗天皇元年元旦、弘計が顕宗天皇として即位する。引き続き億計が皇太子を務めたが、天皇の兄が皇太子という事態は、これ以降も例がない。罪無くして死んだ父を弔い、また父の雪辱を果たすべく雄略天皇への復讐に走り意祁命にその陵の破壊を命じることもあったが、長く辺土で苦労した経験から民衆を愛する政治を執ったと伝えられる。

清寧天皇二年十一月 播磨國司山部連先祖伊與來目部小楯 於赤石郡親辨新嘗供物・・・

播磨の国司で山部連の先祖の伊與來目部小楯が赤石郡で新嘗の供物をわけた。・・・

この記事は 907 文字と長く、弘計・億計皇子の話が書かれている。

清寧天皇三年正月。天皇隨億計王到攝津國

天皇は億計王とともに摂津国に到着した。

清寧天皇五年正月 白髮天皇崩 皇太子億計王與天皇讓位 久而不處由是天皇姉飯豐青皇女於忍海角刺宮臨朝秉政

清寧天皇**が**崩じた。顯宗天皇と皇太子の億計王は皇位を譲った。空白が生じるため、天皇の姉の飯豐青皇女は忍海角刺宮で政治を摂った。

十一月 飯豐青尊崩 葬葛城埴口丘陵

飯豐青尊が崩じた。葛城埴口丘陵に葬った。

ここで、崩が用いられている。

吉備に迎えにいったのではなく、吉備から向かったのではないか。

吉備(と播磨)を平定後、留守部隊を残し、吉備王朝の本体は東進したとも考えられる。

十二月 百官大會 皇太子億計取天皇之璽 置之天皇之坐

百官が集まった。皇太子の億計は取天皇之璽をとり、天皇の坐においた。

ここからが記年記事である。

元年正月 大臣 大連等奏言 皇太子億計聖徳明茂 奉讓天下

大臣・大連らが奏上した: 皇太子の億計は聖徳明茂であり、天下を譲るよう奉る。

是月 立皇后難波小野王 赦天下 (難波小野王 雄朝津間稚子宿禰天皇曾孫 磐城王孫 丘稚子王之女也)

難波小野王を皇后とし、恩赦を行った。(難波小野王は允恭天皇の曾孫で、磐城王の孫で、丘稚子王の女である。)

Wikipedia「磐城皇子」では

磐城皇子は雄略天皇と吉備上道臣氏出身の稚媛との間の子で、星川稚宮皇子の同父兄。異父兄に吉備上道兄君、吉備上道弟君がいる。

二年八月 天皇謂皇太子億計曰 吾父先王無罪 而大泊瀬天皇射殺棄骨郊野 至今未獲・・・

天皇は皇太子の億計にいった：我が父王は無罪である。雄略天皇は射殺し骨を郊野に棄てた。今だに獲られていない。・・・

三年二月 阿閉臣事代銜命 出使干任那

阿閉臣の事代銜に任那への使いを命じた。

四月 置福草部　　福草部を置いた。

天皇崩干八釣宮　　天皇八釣宮で崩御した。

是歳 紀生磐宿禰跨據任那 交通高麗將西王三韓整脩宮府 自稱神聖 用任那左魯那奇 他甲肖等計殺百済適莫爾解於爾林(爾林高麗地也) 築帶山城 距守東道 斷運粮津令軍飢困 百済王大怒遣領軍古爾解 内頭莫古解等 率衆趣干帶山攻 於是 生磐宿禰進軍逆擊 膽氣益壯 所向皆破 以一當百 俄而兵盡 力竭 知事不濟 自任那歸 由是 百濟國殺佐魯那奇 他甲肖等三百餘人

この年、紀生磐宿禰は任那を跨據(飛び越)し、高麗の將西王と三韓の整脩宮府の交渉した。自ら神聖と称し、任那左魯那奇と他の甲肖らと計り、百済の適

莫爾解を爾林で殺した。(爾林は高麗の地である。)帯山城を築き、東道を距て守った。・・・

顕宗天皇→仁賢天皇 は 弟→兄 となっている。

16.11. 仁賢天皇紀　億計天皇

前文は 255 文字で短い。

億計天皇 諱大脚 弘計天皇同母兄也

億計天皇 諱は大脚である。弘計天皇の同母兄である。

穴穂天皇崩(安康天皇)(丙申四五六) 避難於丹波國余社郡

安康天皇が崩じた。丹波国余社郡に避難した。

清寧天皇元年(庚申四八〇)十一月 播磨國司山部連小楯 詣京求迎白髮天皇尋遣小楯 持節將左右舍人 至赤石奉迎

播磨国司の山部連小楯は京に詣で求迎した(?)。理解できない。

二年(辛酉四八一)四月 遂立億計天皇爲皇太子 (事具弘計天皇紀)

遂に億計天皇を皇太子とした。(事態は弘計天皇紀にある。)

五年(甲子四八四)白髮天皇崩 天皇以天下讓弘計天皇 爲太子如故(事具弘計天皇紀也)

清寧天皇が崩じた。天皇は天下を弘計天皇に譲った。太子はそのままにした。(事態は弘計天皇紀にある。)

顕宗天皇三年(丁卯四八七)四月 弘計天皇崩　　弘計天皇が崩じた。

干支と続く西暦はこの仁賢天皇紀の前文にのみ書かれている。維基文庫かその底本の段階でつけられたと思われる。ここに書かれた西暦は空企画のものと一致している。丙申は 33 番目、庚申は 57 番目、辛酉は 58 番目、甲子は 1 年目、丁卯は 4 遍目である。

雄略天皇の時代の記事がない。隠れ住んでいた時だから当然ともいえるが少し違和感を覚える。図 Vii01 の A 系統(履中天皇の子孫)と B 系統(允恭天皇の子と孫)を考察が必要。

皇太子菟道稚郎子と仁徳天皇でも兄弟間で皇位を譲り合った。

顕宗天皇紀とこの前文では、中国語として疑問と思われる記事が多くみられる。

ここでは丹波国と播磨国が現れている。前天皇記に書かれている摂津国と併せれば、中国道ルートが浮かんでくる。

辛巳朔乙酉(元年) 皇太子於石上廣高宮即天皇位 (或本云 億計天皇之宮有二所焉 一宮於川村 二宮於縮見高野 其殿柱至今未朽)

皇太子は石上廣高宮において即位した。

この記事の年記の部分は辛巳朔乙酉となっている。

二月 立前妃春日大娘皇女爲皇后 （春日大娘皇女 大泊瀬天皇娶和珥臣深目之女童女君所生也）遂産一男六女・・・次和珥臣日爪女糠君娘生一女。是爲春日山田皇女

前の妃の春日大娘皇女を皇后とした。（皇子・皇女のリスト） 次妃は和珥臣日爪の女の糠君娘で一女を生んだ。これが春日山田皇女である。

十月 葬弘計天皇干傍丘磐杯丘陵　　弘計天皇を傍丘磐杯丘陵に葬った。

二年九月 難波小野皇后 恐宿不敬自死 （弘計天皇時皇太子億計侍宴取瓜將喫 無刀子 弘計天皇親執刀子 命其夫人小野傳進夫人 就前立置刀子於瓜盤 ▼是日更酌酒立喚皇太子 縁斯不敬 恐誅自死）

難波小野皇后は不敬を恐れ自死した。・・・

Wikipedia「難波小野王」

難波小野王は、顕宗天皇の皇后。難波小野女王とも。古事記には難波王とある。父は紀に丘稚子王（磐城王の子、磐城王は雄略天皇の皇子・磐城皇子か）、記に石木王(磐城皇子と同一人物と考えられる)とある。母は未詳。

顕宗天皇元年１月、顕宗天皇の即位と同月に皇后に立った。子女は無し。顕宗天皇が崩御し、次いで仁賢天皇が即位すると、皇太子であ

った頃の仁賢天皇に行った無礼な振舞いにより誅殺されることを恐れ、仁賢天皇２年９月に自殺した。

三年二月　置石上部舍人　　石上部舍人を置いた。

四年　的臣蚊嶋・穗瓮君(瓮　此云倍)有罪　皆下獄死。

的臣蚊嶋・穗瓮君(瓮は倍と云う)は有罪。皆獄死(と?)した。

譲り合った後に、皇位を継承した後の記事としては、少し生臭い気がする。事後の関係者処分とも考えられる。

五年二月　普求國郡散亡佐伯部　以佐伯部仲子之後　爲佐伯造　(佐伯部仲子事見弘計天皇紀)

普求国郡は佐伯部に散亡した(?)。佐伯部仲子の後を佐伯造とした。(佐伯部仲子のことは弘計天皇紀を見よ。)

六年九月　遣日鷹吉士使高麗召巧手者

巧手者を召すために日鷹吉士を高句麗に使いとして派遣した。

是秋　日鷹吉士被遣使後　有女人居干難波御津　哭之曰　・・・

この秋、日鷹吉士が派遣された後、難波御津に女人がいて、嘆いていった：・・・

是歲 日鷹吉士還自高麗 獻工匠須流枳 奴流枳等 今倭國山邊郡額田邑熟皮高麗 是其後也

この年、日鷹吉士は高麗より帰って、工匠の須流枳と奴流枳らを献じた。倭國山邊郡額田邑の熟皮高麗はその末裔である。

七年正月 立小泊瀬稚鵠鷄尊爲皇太子 小泊瀬稚鵠鷄尊を皇太子とした。

十一年八月 天皇崩于正寢 天皇は正寢で崩御した。

十月 葬埴生坂本陵 埴生坂本陵に葬った。

16.12. 武烈天皇紀　小泊瀬稚鷦鷯天皇

前文は 1287 字で長い。

億計天皇太子也 母曰春日大娘皇后 億計天皇七年 立爲皇太子

億計天皇(仁賢天皇)の皇太子である。母は春日大娘皇后で仁賢天皇 7 年に皇太子となった。

仁賢天皇十一年八月 仁賢天皇崩 大臣平群眞鳥臣 專擅國政 欲王日本 陽爲太子營宮 了即 自居

仁賢天皇が崩御した。大臣の平群眞鳥臣は国政をもっぱらにしていた。・・・(・・・はわからない。この後も 828 字の記事が続く。)

十一月 大伴金村連謂太子曰 眞鳥賊 可擊 請討之 太子曰 天下将亂 非希世之雄 不能濟也 能安之者 其在連乎 即與定謀 於是大伴大連率兵自將圍大臣宅 縱火燔之 所口雲靡 眞鳥大臣、 恨事不濟 知身難免 計窮望絶 廣指臨詛 遂被殺戮 及其子弟 詛時 唯忘角鹿海鹽不以爲詛 由是角鹿之鹽爲天皇所食 餘海之臨爲天皇所忌

十二月 大伴金村連平定賊訖 反政太子 請上尊號曰 今億計天皇子唯有陛下 億兆欣歸 曾無與二 又頼皇天翼戴淨除凶黨 英略雄斷 以盛天威天祿 日本必有主 主日 本者非陛下而誰 伏願 陛下仰答靈祇 弘

宣景命 光宅日本 誕受銀郷 於是太子命有司設壇塲於泊瀬列城 陟天皇位 遂定都焉

8月･11月･12月の記事は理解できていない。訳を兼ねてWikipedia「武烈天皇」から引用する。

仁賢天皇7年正月3日に立太子する。同11年8月8日に仁賢天皇が崩御した後、大臣の平群真鳥が国政をほしいままにした。大伴金村などは、それを苦々しく思っていた。皇太子は、物部麁鹿火の娘影媛との婚約を試みるが、影媛は既に真鳥大臣の子平群鮪と通じていた。海柘榴市の歌垣において鮪との歌合戦に敗れた太子は怒り、大伴金村をして鮪を乃楽山に誅殺させ、11月には真鳥大臣をも討伐させた。そののち同年12月に即位して、泊瀬列城に都を定め、大伴金村を大連とした。

なお、日本書紀は、武烈天皇の異常な行為を記している。その部分を以下に列挙する。（略）なお、これら天皇による悪逆非道の記述は、古事記には一切見られない。天皇には子がなかった。御子代として小長谷部（小泊瀬舎人）を置いたという。

前文は

是日 以大伴金村連爲大連　　大伴金村連を大連とした。

で終わっている。

元年春三月 立春日娘子爲皇后（末詳娘子父）

春日娘子を皇后とした。（娘子の父はわかっていない。）

二年九月 刳孕婦之腹而觀其胎　　妊婦の腹をさき胎児を観た。

暴虐の象徴的な記事である。継体天皇への環境造りか。

三年十一月 詔大伴室屋大連 發言濃國男丁 作城像於水派邑 仍曰城上也

詔大伴室屋大連をよび、濃国男丁に水派邑城をつくるようにいった。城上である。

大連は大伴室屋と大伴金村の２人がいたことになる。

是月 百濟意多郎卒 葬於高田丘上

この月、百濟意多郎が卒した。高田丘上に葬った。

四年四月 抜人頭髪使昇樹巓 □倒樹本 落死昇者爲快

人の髪を抜いて木登りをさせ、木の根元を切り倒し、登らせた者を落とし殺して面白がった。(Wiki「武烈天皇」)

是歲 百濟末多王無道 暴虐百姓 國人遂除而立嶋王 是爲武寧王(百濟新撰云 末多王無道暴虐百姓。國人共除。武寧立。諱斯麻王。是混攴王子之 子。則末多王異母兄也。混攴向倭時。至筑紫嶋生斯麻王。自嶋還送。不至於京産於嶋。故因名焉。今各羅海中有主嶋。王所産嶋。故百濟人號爲主嶋。今案嶋王。 是蓋鹵王之子也。末多王是混攴王之子也。此曰異母兄未詳也)

この年、百済の末多王は無道で百姓に暴虐を行った。国人は王を排除し、嶋王を立てた。これが武寧王である。諱は斯麻王で混攴王子の子であり、末多王は異母兄である。混攴王が倭に向かうとき、筑紫嶋で斯麻王が生まれた。・・・

作業仮説 IV 02「武烈天皇四年は 502 年、元年は 499 年である。」はこの記事に基づいている。

嶋君は雄略天皇五年 461 の記事にでている。武寧王の前の王は東城王(諱は牟大)となっている。武寧王の在位期間は 502 年から 523 年。武烈天皇四年は 502 年となり、倭王武は武烈天皇となる。(作業仮説は保留)

六年九月 詔曰 傳國之機 立子爲貴 朕無繼嗣 何以傳名 且依皇舊例 置小泊瀬舍人 使爲代號萬歲難忘者也

（訳の替わりに、前述の引用文の最後を再掲しておく。） 天皇には子がなかった。御子代として小長谷部（小泊瀬舍人）を置いたという。

十月 百濟國遣麻那君進調 天皇以爲 百濟歷年不脩貢職 留而不放

百濟國は麻那君を進調のため派遣してきた。百済は歴年にわたり不脩貢職であるとして、天皇は抑留した。

七年四月 百濟王遣期我君進調 別表曰 前進調使麻那者非百濟國主之骨族也 故謹遣斯我奉事於朝 遂有子 曰法師君 是倭君之先也

百済王は期我君を進調進調のため派遣してきた。別表では前の進調の使いの麻那は百済国主の骨族ではない。（・・・は理解できていない。）

文意から期我は百濟國主之骨族。蘇我氏も似た可能性は。

八年三月 使女裸形坐平板上 牽馬就前遊牝

女を裸にして平板の上に座らせ、馬を引き出して女らの面前で馬に交尾させた。（Wiki「武烈天皇」）

これも暴虐の記事である。四年四月・七年二月の記事も同じかもしれない。何故暴虐の記事がおおいのか、非道の王にしたいのか。

八年十二月 天皇崩于列城宮　　天皇は列城宮で崩御した。

イメージとして、武とするには在位期間が短い気がする。
A 系統(吉備王朝)と B 系統(河内)が並立し、A 系統の武烈天皇に統一された。2 系統を 1 つにまとめるため、王の在位期間を縮めた。

16.13. 継体天皇紀　男大迹天皇

前文は 340 文字で短い。

男大迹天皇 （更名彦太尊） 譽田天皇五世孫彦主人王之子也 母曰振媛 振媛活目天皇七世之孫也 天皇父聞振媛顔容姪妙甚有■色 自近江國高嶋郡三尾 之別業 遣使聘于三國坂中井 （中 此云那） 納以爲妃 遂産天皇 天皇幼年父王薨 振媛迺歎曰 妾今遠離桑梓 安能得膝養 余歸寧高向（高向者 越前 國邑名）奉養天皇

男大迹天皇(継体天皇)(彦太尊ともいう)は、譽田天皇(応神天皇)5 世の孫彦主人王の子である。母は振媛で、活目天皇(垂仁天皇)の七世の孫である。天皇の父は振媛の顔容が姪妙で甚だ有□色であることを聞き、近江国高嶋郡三尾の別業より使いを三國坂中井(中は那をいう)送り招いた。妃とし、天皇を産んだ。天皇が幼いとき父王は薨じた。振媛は嘆いていった：・・・高向(高向は 越前国の邑の名)に帰り天皇を育てる。

顯宗天皇に比べて前文での即位の経過が短すぎる。即位の過程はあまり触れたくないという事か。

応神天皇の五世の孫ということは倭の五王の五を連想させ、倭王

の武ではないかとも連想させる。応神が讃、雄略が興、繼體が武とすれば、残りは2王となる。武の朝貢は478年から502年であるから、このままでは合わない。名前からは、武烈天皇のほうがとも思われる

仁徳天皇から武烈天皇に至る系列とは別の王統。九州にいたか、四国北岸を東征した本隊ではないか。

前文では経歴的な文に続き、次が書かれている。

天皇年五十七歳 武烈天皇八年十二月 小泊瀬天皇崩 元無男女 可絶繼嗣

大伴金村大連議曰 方今絶無繼嗣 天下何所繫心 自古迄今 禍由斯起 今足仲彦天皇五世孫 倭彦王 在丹波國桑田郡 請試設兵仗 夾衛乘輿 就而奉迎 立爲人主 大臣 大連等一皆隨焉 奉迎如計 於是倭彦王遥望迎兵 懼然失色 仍遁山壑不知所詣

この記事の訳と他の記事の訳の部分的検証を兼ねてWikipedia「継体天皇」の記事を引用する。

記紀は共に継体天皇を応神天皇の5世の子孫と記している。また、日本書紀はこれに加えて継体を11代垂仁天皇の女系の8世の子孫とも記している。日本書紀によれば、450年頃に近江国高嶋郷三尾野(現

在の滋賀県高島市近辺）で誕生したが、幼い時に父の彦主人王を亡くしたため、母・振媛は、自分の故郷である越前国高向（現在の福井県坂井市丸岡町高椋）に連れ帰りそこで育てられ、男大迹王として5世紀末の越前地方を統治していた。

日本書紀では越前から迎えたとあるが、古事記では近江から迎えたとある。

日本書紀によれば、506年に武烈天皇が後嗣を定めずに崩御したため、大連・大伴金村、物部麁鹿火、大臣・巨勢男人ら有力豪族が協議し、まず丹波国にいた14代仲哀天皇の5世の孫である倭彦王を推戴しようとしたが、倭彦王は迎えの兵を見て恐れをなして山の中に隠れて行方不明となってしまった。やむなく群臣達は越前にいた応神天皇の 5 世の孫の男大迹王を迎えようとしたものの、疑念を持った男大迹王は河内馬飼首荒籠を使いに出し、大連大臣らの本意に間違いのないことを確かめて即位を決意したとされる。翌年の507年、58歳にして河内国樟葉宮において即位し、武烈天皇の姉にあたる手白香皇女を皇后とした。即位19年後の526年にして初めて大倭に入り、都を定めた。翌年に百済から請われて救援の軍を九州北部に送ったものの、しかし新羅と通じた筑紫君・磐井によって反乱が起こり、その平定に苦心している。

崩年に関しては日本書紀によれば、531 年に皇子の勾大兄(安閑天皇)に譲位(記録上最初の譲位例)し、その即位と同日に崩御した。古事記では継体の没年を 527 年としており、そうであれば都を立てた翌年に死去したことになる。日本書紀では没年齢は 82 歳。古事記では没年齢は 43 歳。

元年 507 正月 大伴大連金村大連更籌議曰 男大迹王性慈仁孝順 可承天緒 冀慇懃勸進 紹隆帝業 物部麁鹿火大連 許勢男人大臣等僉曰 妙簡枝孫 賢者 唯男大迹王也

大伴大連金村大連はさらに議を籌っていった:(大意: 継体天皇の即位に物部麁鹿火大連と許勢男人大臣が賛成した。)

遣臣連等 持節以備法駕 奉迎三國 夾衛兵仗 肅整容儀 警蹕前駈 晏然而至 於是男大迹天皇晏然自若

節刀をもち、かごを備えた臣連らを派遣し、三国に迎えた。・・・

奉迎三國の三国は最初の記事の遣使聘于三國坂中井であろう。

天皇行至樟葉宮　　至樟葉宮に行った。

遷都とは書かれていなし、造営も書かれていない。樟葉宮はこの時点で既にあったことになる。とすれば、何時誰により造営されたのか。この後の５年の記事からここが都(邪馬台国)であった。

三月　立皇后手白香皇女　脩教于内　遂生一男　是爲天國排開廣庭尊（後の欽明天皇）（開　此云波羅企）　是嫡子而幼年　於二兄治後　有其天下（二兄者　廣國排武金日尊與武小廣國押盾尊也）

（訳）手白香皇女を皇后とした。脩教于内　男子を生んだ。これが欽明天皇である。嫡子であるが幼少の為、２人の兄の後に皇位に就いた。（為が抜けているのはどの段階で抜けたのか?）

二年 508 十月　葬小泊瀬稚鷦鷯天皇于傍丘磐杯丘陵

小泊瀬稚鷦鷯天皇を傍丘磐杯丘陵に葬った。

十二月　南海中耽羅人初通百濟國

南海の耽羅人が初めて百済国と通交した。

耽羅は済州島とされている。済州島の人が百済と通交することが何故記事となるのか。この時点では、朝鮮半島南部に飛び地的な領地

があった。

三年 509 二月 遣使于百濟 （百濟本記云 久羅麻致支彌從日本來 未詳）括出在任那日本縣邑百濟百姓浮逃絶貫三四世者並遷百濟附貫也

百済に使いを派遣した。（百済本記では： 久羅麻致支彌が日本より來た 未詳） 任那日本縣邑にいる百済の百姓で逃亡し本貫を絶えた者の 3・4 世を括出し百済の本貫に還した。

Wiki「括出」では

括出は、括首とも呼ばれ、律令制において戸籍・計帳に載せられていない者を官司が摘発して付載させること。

雄略天皇廿年 476 の 高麗王大發軍兵 伐盡百濟 による逃亡者かとも考えられる。

任那日本縣邑 は初めて。任那の中に日本縣邑があった。いわゆる日本府か。旧唐書の 或云 日本舊小國 併倭國之地 にある小国とすれば、卑弥呼から続く倭王朝とは異なるのではないか。

五年 511 十月 遷都山背筒城 山背筒城に遷都した。

六年 512 四月 遣穂積臣押山使於百濟 仍賜筑紫國馬卅匹

遣穂積臣押山を百濟に派遣した。なお、筑紫國の馬卅匹を賜うた。

馬卅匹をどうしたのか。船で運べたのか。不可能とは言えない。

十二月 **百濟遣使貢調 別表請任那國上□□ 下□□ 娑陀 牟婁四縣 □□國守穂積臣押山奏曰 此四縣近連百濟 遠隔日本 旦暮易通 鷄犬難別 今賜百濟合爲同國 固存之策無以過此 然縱賜合國 後世猶危 況爲異場幾年能守 大伴大連金村具得是言 同謨而奏 迺以物部大連麁鹿火宛死宣勅使 物部大連方欲發向難波館宣勅於百濟客 其妻固要曰**

百濟は貢調の使いを派遣した。別表で任那國の上□□・下□□・娑陀・牟婁の四縣を請うた。□□國守の穂積臣押山は奏上した：この四縣は百濟に近くつながっている。日本は遠く離れている。・・・

七年 513 六月 百濟遣姐彌文貴將軍 洲利即爾將軍 副穂積臣押山（百濟本記云 委意斯移麻岐彌） 貢五經博士段楊爾 別奏云 伴跛國略奪臣國己□之地 伏請 天恩判還本屬

百濟は姐彌文貴將軍と洲利即爾將軍と副として穂積臣押山を派遣し、五經博

士の段楊爾を貢いだ。別に奏上した： 伴跛國が我が国の己□の地を略奪した。・・・

八月 百濟太子淳陀薨 百濟の太子の淳陀が薨かった。

百済本記武寧王紀には立太子の記事がない。（見過ごしかも。）

十一月 於朝庭引列百濟姐彌文貴將軍 斯羅□得至 安羅辛已奚及賁巴委佐 伴跛既殿奚及竹□至等 奉宣恩勅 以己□帶沙賜百濟國

百済の姐彌文貴將軍、斯羅□得至、安羅辛已奚および賁巴委佐らを朝廷で引見した。・・・己□帶沙を百済に賜うた。

是月 伴跛國遣□攴 獻珍寶乞己□之地 而終不賜國

この月、伴跛國□攴を遣わして珍寶を献じた。しかし、国は与えなかった。

□帶沙は六年十二月の記事ににある任那国の 4 県にはない。

八年 514 三月 伴跛築城於子呑帶沙 而連滿奚 置烽候邸閣 以備日本 得築城於爾列比 麻須比 而□麻且奚・推封 聚士卒兵器以逼新羅 駈

略子女剥掠村邑 凶勢所加 □有遺類 夫暴虐奢侈 悩害侵凌 誅殺尤多 不可詳載

伴跛は子呑帯沙で城を築いた。（後は理解できず）

□帯沙の□は子呑か。

九年 515 二月 百濟使者文貴將軍等請罷 仍勅副物部連(闕名)遣罷歸之（百濟本記云 物部至至連）

百濟の使者文貴將軍らはやめることを請うた。よって副の物部連を遣わし、やめて帰らせた。

是月 到于沙都嶋 傳聞 伴跛人懐恨御毒 恃強縱虐 故物部連率舟師五百 直詣帯沙江 文貴將軍自新羅去

この月、沙都嶋に到った。伴跛人は 懐恨御毒 恃強縱虐 であることを伝え聞いた。それゆえ、物部連は舟師五百を率いて直接帯沙江に詣でた。文貴將軍は新羅より去った。

四月 物部連於帯沙江停住六日 伴跛興師往伐 逼脱衣裳劫掠所賚 盡燒帷幕 物部連等怖畏逃遁 僅存身命泊□慕羅（□慕羅 嶋名也）

物部連は帯沙江に停まること六日であった。（後は理解できず）

十年 516 五月 百濟遣前部木□不麻甲背 迎勞物部連等於己□ 而引導

入國 群臣各出衣裳斧鐵帛布 助加國物積置朝廷 慰問慇懃 賞祿優節

百濟は前部木□不麻甲背を遣わし、物部連らを己□で迎えた。 ・・・。

九月 百濟遣州利即次將軍副物部連來謝賜己□之地 別貢五經博士漢高安茂請代博士段楊爾 依請代之

百濟は州利即次將軍を遣わし副の物部連に謝し己□の地を賜った。別に五經博士を貢いだ。漢高安茂は博士段楊爾に代わことを請うた ・・・

百濟遣灼莫古將軍 日本斯那奴阿比多 副高麗使安定等 來朝結好

百濟は灼莫古將軍を遣わした。・・・

十二年 518 三月 遷都弟國 弟國に遷都した。

十七年 523 五月 百濟國王武寧薨 523 百濟國王武寧が薨かった。

この記事より

作業仮説 IV0「継体天皇十七年は 523 年、元年は 507 年である。」を得た。空企画における記年と一致する。

十八年 524 百濟太子明即位 百濟の太子の明が即位した。

明は聖王で在位は 523 年から 554 年。

廿年526六月 遷都磐余玉穂（一本云 七年也）　　磐余玉穂に遷都した。

遷都の経緯は次である。

元年 行至樟葉宮 → 五年 遷都山背筒城 → 十二年 遷都弟國

→ 廿年 遷都 磐余玉穂

都はどの程度の規模か。仁賢天皇紀の丹波国・播磨国と顕宗天皇紀の摂津国を併せれば、中国道から西国街道が浮かんでくる。

廿一年 527 六月 近江毛野臣率衆六萬 欲往任那爲復興建新羅所破南加羅 喙己呑而合任那 於是筑紫國造磐井陰謨叛逆 猶豫經年 恐事難成恒 伺間隙 新羅知是 密行貨賂于磐井所 而勸防遏毛野臣軍 於是磐井掩據火豐二國 勿使修職 外逢海路誘致高麗百濟新羅任お那等國年貢職船 内遮遣任那毛野臣軍

近江毛野臣が6万を率いて、新羅に破れた南加羅と喙己呑を復興し任那と併合しようと任那に往こうとしたとき、筑紫國造の磐井が(陰謀し)叛逆した。・・・

以下 3 つの記事は磐井の叛逆への対応。火豐二國は東遷直前に邪馬台国が在った所と考えている。

八月 詔曰 咨大連茲惟磐井弗率 汝徂征 物部麁鹿火大連再拜言 嗟夫磐井西戎之奸猾・・・

（理解できていない）

廿二年 528 十一月 大將軍物部大連麁鹿火親與賊帥磐井交戰於筑紫御井郡 旗鼓相望 埃塵相接 決機兩陣之間不避萬死之地 遂斬磐井 果定橿場

大將軍物部大連麁鹿火は筑紫御井郡において親與賊帥磐井と交戦した。・・・遂に磐井を斬った。

大將軍の初出。

十二月 筑紫君葛子恐坐父誅 獻糟屋屯倉 求贖死罪

筑紫君葛子は恐れ父を誅し、糟屋屯倉を献じ、死罪で贖うことを求めた。

Wiki「磐井の乱」

磐井の乱は、527 年(継体 21 年)に朝鮮半島南部へ出兵しようとした近江毛野率いるヤマト王権軍の進軍を筑紫君磐井(日本書紀は筑紫国造だったとする）がはばみ、翌 528 年(継体 22 年)11 月、物部麁

鹿火によって鎮圧された反乱、または王権間の戦争。この反乱もしくは戦争の背景には、朝鮮半島南部の利権を巡るヤマト王権と、親新羅だった九州豪族との主導権争いがあったと見られている。

経緯： 真偽は定かでないが日本書紀に基づいて、磐井の乱の経緯をたどるとおよそ次のとおりである。

527年(継体21)6月3日、ヤマト王権の近江毛野は6万人の兵を率いて、新羅に奪われた南加羅・喙己呑を回復するため、任那へ向かって出発した。この計画を知った新羅は、筑紫(九州地方北部)の有力者であった磐井(日本書紀では筑紫国造磐井)へ贈賄し、ヤマト王権軍の妨害を要請した。

磐井は挙兵し、火の国と豊の国を制圧するとともに、倭国と朝鮮半島とを結ぶ海路を封鎖して朝鮮半島諸国からの朝貢船を誘い込み、近江毛野軍の進軍をはばんで交戦した。このとき磐井は近江毛野に「お前とは同じ釜の飯を食った仲だ。お前などの指示には従わない。」と言ったとされている。ヤマト王権では平定軍の派遣について協議し、継体天皇が大伴金村・物部麁鹿火・巨勢男人らに将軍の人選を諮問したところ、物部麁鹿火が推挙され、同年8月1日、麁鹿火が将軍に任命された。

528年11月11日、磐井軍と麁鹿火率いるヤマト王権軍が、筑紫三

井郡(現福岡県小郡市・三井郡付近)にて交戦し、激しい戦闘の結果、磐井軍は敗北した。日本書紀によると、このとき磐井は物部麁鹿火に斬られたとされているが、筑後国風土記逸文には、磐井が豊前の上膳県へ逃亡し、その山中で死んだ(ただしヤマト王権軍はその跡を見失った)と記されている。同年 12 月、磐井の子、筑紫葛子は連座から逃れるため、糟屋(現福岡県糟屋郡付近)の屯倉をヤマト王権へ献上し、死罪を免ぜられた。

乱後の 529 年 3 月、ヤマト王権(倭国)は再び近江毛野を任那の安羅へ派遣し、新羅との領土交渉を行わせている。

以上のほか、筑後国風土記逸文には交戦の様子とともに磐井の墓に関する記事が残されている。また、古事記は、筑紫君石井が天皇の命に従わないので、天皇は物部荒甲(物部麁鹿火)と大伴金村を派遣して石井を殺害させた、と簡潔に記している。国造本紀には磐井と新羅の関係を示唆する記述がある。

続いて新羅・任那をめぐる話が書かれている。

廿三年 529 三月 百濟王謂下□□國守穗積押山臣曰 夫朝貢使者恒避嶋曲 (謂海中嶋曲碕岸也 俗云美佐祁) 毎苦風波 因茲濕所賚 全壞

無色 請以加羅多沙津爲臣朝貢津路 是以 押山臣爲請聞奏

百済王下□□国守の穂積押山臣に行った： 朝貢使者の恒避嶋曲はいつも波風に苦しめられている。・・・加羅多沙津を臣下の朝貢津路とすることを請うた。・・・

是月 遣物部伊勢連父根 吉士老等 以津賜百濟王 於是 加羅王謂勅使云 ・・・

この月、物部伊勢連の父根吉士老らを遣わして、津を百済王に賜うた。加羅王は勅使が ・・・ と云うと謂った。

是月 遣近江毛野臣使于安羅 勅勸新羅更建南加羅 ・・・

この月、近江毛野臣を安羅に使いとして派遣した。 ・・・

四月 任那王己能末多干岐來朝 （言己能末多者 蓋阿利斯等也） 啓大伴大連金村曰 夫海表諸蕃 自胎中天皇置内官家不棄本土 因封其地良有以也 今新羅違元所賜封限 數越境以來侵 請奏天皇救助臣國 大伴大連依乞奏聞

任那王の己能末多干岐が來朝した。はじめに大伴大連金村がいった・・・

是月 遣使送己能末多干岐并詔在任那近江毛野臣 推問所奏和解相疑 於是 毛野臣次于熊川 ・・・

この月、己能末多干岐を送り、任那にいる近江毛野臣をよぶ使いを派遣した。・・・

廿四年 530 九月 任那使奏云 毛野臣遂於久斯牟羅起造舍宅 淹留二歳 ・・・

任那の使は奏上した：毛野臣は久斯牟羅に舍宅を造り起こし、留まること 2 年である。

十月 藍野陵至自任那 奏言 毛野臣爲人傲恨不閑治體 竟無和解 擾亂加羅 又□儻任意而思不防患 故遣目頬子徵召（目頬子 未詳也）

藍野陵は任那より帰り奏上した：毛野臣は傲慢で・・・

廿五年 531 二月 天皇病甚 天皇の病が甚だしかった。

天皇崩于磐余玉穗宮 時年八十二

天皇は磐余玉穗宮で崩御した。82 歳であった。

十二月 葬于藍野陵 藍野陵に葬った。

25 年に 82 歳で崩御ということから、即位時の年齢は 58 歳となる。

インテルメディオ　(Part VII あとがき)

日本書紀の応神天皇紀から継体天皇紀までを見てきた。本 Part では、複数王朝の並立が成り立つかを検討課題として、全体を眺め疑問点を挙げることに止め、引用を必要とする考察は、次章に持ち越すことにした。

印象に残っていることを挙げていく。

まずは、在位期間が短く記事の少ない天皇が居ることと、後継の天皇が簡単に決まらない場合と、即位前後に何らかの抗争がある場合が多く見られた。殆どの天皇の即位前か崩御後に何らかの出来事が起きているという印象である。

また、百済と新羅関連の記事が数多くみられることも挙げられる。三国史記については、Part III で三国の王統を主に見てきた。日本書紀の理解には、三国史記もある程度理解しておくことが必要と考えている。最終的な考察はその後になる。

雄略天皇紀からは、何らかの体制造りが行われたという印象を受けた。いわゆる大和朝廷の誕生といえるかもしれない。律令制を目指したと思われる聖徳太子と同じように、雄略天皇の血筋からは天皇は現れていない。

次の清寧天皇を挟んで、吉備出身の顕宗天皇と仁賢天皇が書かれている。両者は吉備に隠れ住んでいたことになっているが、隠れていたのではなく、吉備王朝の存在を隠したかったのではないかとも考えられる。

継体天皇については、5 世の孫というのは同一王朝と言えるのか、という疑問は生じる。Wikipedia「皇室の系図一覧」では別枝のように見える。これは、男性の系列のためかもしれないし、図の描きかたに依るのかもしれない。后妃を入れた系譜が描ければ、他の何かが得られるかもしれない。

図の作成を困難にするのは、複数の皇妃の存在である。これらを表示する手段としては、折り畳み式の布団干し器の中心に男性がいて、端に后妃を 1 人ずつ置き、布団の部分に子供がおかれる。これらを連ねたものが想像される。3 次元の図ならばこれが実現できるかもしれない。さらなる問題は、描いた 3 次元図をどうして見るかである。これは、CAD による家の設計図のように、俯瞰図か断面図で見るしか方法はない。比較的簡単にできそうなのは、ある人の周辺を俯瞰図的に描くこと妥当か。これならばペイント・ツール(お絵かきソフト)で出来そうな気がするが、これでもかなり面倒である。

本稿の目標としては、平安遷都、すなわち、桓武天皇紀まで考えているが、当面は、推古天皇紀(隋書の時代)までを目標としている。

最後に、本稿の構成について述べて(言い訳をして)おこう。

まずは、「Part」は、(構成する)部分である程度まとまった部分、としている。長ければ若干の支障が生じ、文書内を参照するに不便になり、短いと参照するファイルも増えて、画面が混乱する。いまのところ、各 Part の目安は、100 ページから 150 ページとしている。

Part VII 目次

序

16. 応神天皇紀から継体天皇紀 5

序

16.1. 応神天皇紀 譽田天皇 7

16.2. 仁徳天皇紀 大鷦鷯天皇 28

16.3. 履中天皇紀 去來穗別天皇 37

16.4. 反正天皇紀 瑞齒別天皇 42

16.5. 允恭天皇紀 雄朝津間稚子宿禰天皇 44

16.6. 安康天皇紀 穴穗天皇 49

16.7. 雄略天皇紀 大泊瀬幼武天皇 55

16.8. 清寧天皇紀 白髮武廣國押稚日本根子天皇 76

16.9. 飯豊青皇女 80

16.10. 顕宗天皇紀 弘計天皇 82

16.11. 仁賢天皇紀 億計天皇 88

16.12. 武烈天皇紀 小泊瀬稚鷦鷯天皇 93

16.13. 継体天皇紀 男大迹天皇 99

インテルメディオ (Part VII あとがき) 115